
姫君の純愛～鬼と呼ばれた皇子に捧ぐ～ (soft version)

亜久里 恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫君の純愛〜鬼と呼ばれた皇子に捧ぐ〜（soft version）

【Nコード】

N1430U

【作者名】

亜久里 恵

【あらすじ】

「いや。やめて。やめて。いやー！ー！」

平和で豊かな国シェファーズの王女シルヴィアは、神聖リリーアード帝国の『鬼神』、第一皇子 アスターに父王を殺され、国もおのれも、力づくで奪われた。しかし、アスターと接していくうちに、彼が示す刹那の優しさと寂しげな空気に心揺れ始める。

「愛してはいけない。愛されたいとも思っ
てはいけない。なぜなら
彼は憎い敵なのだから……」

それが、シルヴィアの辛く、苦しい恋の始まりだった。

これは18禁ページで掲載しているものを修正して掲載した
ものです。（モバゲー&エブリスタに投稿していたものを少し修正して
新たに投稿させていただきます。）

序

「あつ。いやっ。いやっ。やめてっ。もうやめてっ。おねがい」

身体を揺すられ、ベッドに絹糸のような白銀の髪が散らばる。彼女に覆いかぶさっているのは、人間なのか。

それとも鬼か。

身体を中心に穿たれた杭から侵食されていく。いや、鬼に食い殺されていく。

『痛い。痛い。身体が引き裂かれる。怖い。いや。やめてっ!』

エメラルド色の瞳が涙を含み、光を浴びて乱反射する。その様を黒き鬼は満足そうに眺めていた。

「いや。やめて。やめて。いやー!」

彼女の悲鳴が部屋中にこだまする。あの時は、自分がこんな状況に陥るなど夢にも思わなかった。

『お父様……』

肉体的にも精神的にもボロボロになり、これ以上意識を保つことに拒否反応を示した彼女の瞳はゆっくりと閉じられ、その様を鬼は恍惚の表情で見つめるのだった。

変革の波 嵐の一夜

緑豊かな大地と美しい湖に囲まれた小国、シェファーズ。大陸の中心、文化の中心から外れた辺境の国でありながら、周辺諸国から「天の花園」と呼ばれる平和な国だった。

しかし、いつもなら青々と続く空は暗雲が立ち込め、灰色の煙があらゆるこちらから空へと駆け上がっていた。緑豊かな黄金色の大地は踏みにじられ、きらきらと光る湖は赤く染まっていた。大地を埋め尽くすほどの怒号の嵐。【天の花園】は一瞬にして【地の悪夢】と化した。

その先頭に立つのは、神聖リリイアード帝国が誇る第一皇子アスター。連戦連勝。無敗の王子。その悪鬼のごときその強さから諸外国から【鬼神アスター】と恐れられていた。

「者ども。続けー！ この勢いのまま城を落とすぞー！」

オオオオオオオオオオー！

大陸屈指の大国リリイアードと平和な日々を送っていたため、争うことに慣れていない小国シェファーズでは国力も兵力も差があり、破竹の勢いで進軍するリリイアードにシェファーズはなす術もなく彼の国は滅亡寸前だった。

「早く準備なさい。逃げるのよ！」

高価なドレスを着た中年の女性がすごい剣幕で侍女に怒鳴り散らしていた。侍女たちはその女性の指示通り、動き回っている。そんな所へ一人の少女が駆けてきた。

「お母様。何をなさっているのですか？」

扉の入り口に立ちすくむ少女の顔は青ざめ、口元を微かに覆う指先は小刻みに震えていた。

「あら、シルヴィア。ごきげんよう」

母と呼ばれた女性は艶然とした微笑みを浮かべ、ツカツカと歩み寄ると、持っていた扇子で少女の頬を力いっぱい叩いた。

「きゃっ！」

小柄で華奢な少女シルヴィアは、その衝撃で床に倒れ伏す。そして女性は扇子をざっと広げ、倒れ伏した少女を見下ろしていた。その顔に、先ほどの笑みはもうない。あるのは憎しみと嘲笑と嫌悪の色のみ。

「前から言っているであろう。わたくしを母と呼ぶでない。わたくしの娘はただ一人。

あの汚らしい女の娘に母と呼ばれるなど、考えただけで虫唾が走るわ！」

そういうと女性は、シルヴィアの脇腹を蹴りつけた。

「あの女！ 汚らしいリリィアード人！ しかも、たかだか男爵家の娘ごときが先に嫁

いだというだけで、正妃の座に居座っていた女！ ローザリオンの由緒ある侯爵家の娘で

あるこのわたくしが！ あの女のせいで側室扱いを受けるなどっ！」

言葉を区切るたびに、シルヴィアの脇腹を蹴りつける。シルヴィアは歯をくいしばり、口

を真一文字にひき、声が漏れるのを必死にこらえた。悲鳴をあげれば、もっとひどいこと

をされると今までの経験で学んでいたからだ。

変革の波 嵐の一夜2

「あの女にそっくりなその顔、その声で、母などと呼ぶな」

女がシルヴィアを再び蹴りつけようとしたそのとき、横から声がした。

「お母様！ そんな子など放っておいて早く逃げましょう！」

そこには大輪の薔薇のような姫が立っていた。

「ディアナお姉さま」

シルヴィアは上半身を起こし、つぶやいた。しかし、ディアナはシルヴィアに見向きもしない。

「お母様！ 今、伝令が来て、リリアード軍が王都に通じる最後の関門を突破したそうです。もうすぐ、王都になだれ込んできますわ。こんな恐ろしい所に一秒たりともいられません」

その豊かな黒髪を振り乱し、ディアナは母の懷に飛び込んだ。

「おお。可愛そうに、ディアナ。こんなに震えて、大丈夫ですよ。お母様がついていますからね」

先ほどのシルヴィアを蹴りつけていた女性と同一人物とは思えないほど、慈愛に満ちた表情で愛おしそうにディアナの髪をなでる。

「そうね。早く脱出しましょう。さあ、お前たち荷物を運び出しなさい」

そして、そのまま侍女たちを連れ、シルヴィアの脇を通り過ぎようとした。

「おまちください。おかあ……。アルグリア様。どちらへ行かれるのですか？」

シルヴィアは脇腹にはしる痛みをこらえながら、そっと立ち上がる。しかし、二人は歩みを止めようとしないう。シルヴィアは小走りに追いかけて、前方に回りこみ、二人の進路に立ちふさがった。

シルヴィアの行動に気分を害されたアルグリアは無言でスツと目を細める。その眼光を受け、シルヴィアの体がビクツと震えた。しかし、震えながらもシルヴィアは勇気を振り絞り、再度口を開いた。

「アルグリア様。ディアナお姉さま。どちらへ行かれるのですか？」

アルグリアは冷たい眼差しでシルヴィアを見た。

「決まっておろう。逃げるのよ」

シルヴィアは、はじかれたように顔を上げる。

「お待ちください。いまだシェファーズの兵士は、民は、国を守るため、わたくしたちを守るため、リリアードと戦っています」

「そんなこと、お前に教えてもらわなくとも分かっておる」

「それならば、どうして彼らを置いて逃げようとなさるのですか？」

すると、アルグリアは嘲りの笑みを浮かべた。

「なぜだと？　では逆に問う。なぜ、逃げてはならぬのだ」

「アルグリア様は、このシェファーズの王妃様でいらっしやいます。そして、ディアナお姉さまは第一王女。民を守り、国を守るのが王族の務めではないのですか？」

「そう。わたくしはシェファーズ王妃。ディアナは第一王女にして、未来のシェファーズ国王。この国の女王になる人間。だから、わたくしたちはここで死ぬわけにはいかぬ」

「ですが…」

「お前は一つ勘違いをしている」

「勘違い……」

「王族が民のために存在しているのではない。民が王族のために存在しているのだ。下々のものは無学で無能で野蛮な者たち。それをわたくしたち貴族が！　王族が！　統率し、下々の者に居場所や仕事や食料を分けて与えているのだ。神にも等しいわたくしたち王族を民が命がけで守るのは当たり前のこと！　わたくしたちが死ねばシェファーズを再興させることはできぬ。だが、裏を返せば、わたくしたちが生き残りさえすれば、リリアードの手からこの国を取り戻すことができる！　そのためにわたくしたちは今この場を逃れねばならぬのだ」

「そんな……」

「まあ、お前は王族とはいえ、あの穢れた女の娘。下々の者に近い故に理解できぬであろうが……」

「……………」

「さあ、そこをお退き！」

アルグリアは強引にシルヴィアを押しつけ、去っていくとする。

変革の波 嵐の一夜3

「お待ちください。アルグリア様！」

止めるシルヴィアを忌々しい眼で見るとアルグリアは侍女たちに目で合図を送った。頷いた侍女たちは一斉にシルヴィアの腕を取り、拘束する。

「離してください。アルグリア様！」

「残りたければ残るがいい。この沈み行くシェファーズと運命を共にするのがお前にはお似合いだ」

去り行くアルグリアの背にシルヴィアは叫ぶ。

「お見捨てになるのですか。お父様を！」

その言葉にアルグリアは歩みを止める。しかし、ゆっくりと振り返ったアルグリアの瞳は冷たく冷え切っていた。

「ふん。元々、なりたくてあの男の妻になっただけではないわ。わたくしの命をかけるほどの価値もない男など、最早どうなろうと知ったことではない」

あまりの言い草にシルヴィアは絶句する。

「せめてもの慈悲にそなたは、捨て置こうと思っておったが…気が変わった」

すると、シルヴィアの背後から手が伸び、その手が持つ布で口をふさがれる。

アルグリアの侍女の一人だ。

とっさのことにシルヴィアは抵抗する間もなかった。布からは甘い香り。その香りを吸い込んだとたん、シルヴィアの体から力が抜ける。薄れ行く意識の中で、アルグリアの声だけが聞こえた。

「ディアナの衣装を身に着けさせ、部屋に閉じ込めておけ。わたしたちが脱出するまでの時間ぐらい稼げるであろう」

そのまま、シルヴィアの意識は深い闇の中へと落ちていった。

『ここは、どこ？』

シルヴィアは暗闇の中、目を覚ました。周りは黒一色。その世界は天もなく地もなくシルヴィアはふわふわと漂っているような状態だった。何分、何時間、そうやって漂っていただろうか。ふと背後に人の気配を感じた。振り返ると小柄なシルヴィアより頭ひとつ分以上背が高い男が立っていた。その男は黒い髪で黒い鎧に黒いマントをつけ、その手には柄も刃も黒い大剣が握られていた。その剣を見た瞬間シルヴィアは全身があわ立つような悪寒に襲われた。

『怖い……』

シルヴィアはガタガタと震える自分自身を抱きしめた。そうしなければ、自分自身が壊れ崩れてしまうような、狂ってしまうような気

がしたのだ。すると男性はシルヴィアから徐々に遠ざかっていく。一步。また一步。恐れのもとである男が離れていけば震えも治まると思っていた。しかし遠ざかるにつれてシルヴィアの震えはもっとひどくなっていく。

―あの人を行かせてはならない―

なぜかそう感じた。

『待ってくださいっ!』

シルヴィアは彼を追いかけようとしたが、前に進もうにも空気のように漂っている身体は思うように動かない。シルヴィアは焦った。

『どうして。お願い。動いて、動いて』

必死に身体を動かそうとする。しかし、シルヴィアの意志とは逆に身体はどんどん反対方向へと流されていく。

『お願い。待って!』

なんとかしようと必死になってシルヴィアが叫ぶと、その声に反応したからか、急に男の歩みが止まった。男の目の前には身なりのよい一人の男性が跪いている。その様を見たシルヴィアは目を見開いたまま凍りつき、男はゆっくりと動き出した。

『やめて……』

男の腕がゆっくりと振り上げられる。

『やめて……。お願い…』

その手には漆黒の大剣。

『お願い。お願いっ。やめてっ……。』

そして、振り下ろされた。

『いやー！ー！』

変革の波 嵐の一夜4

悲鳴をあげるのと同時にハッと目が覚めた。

『ゆめ……』

シルヴィアは身を起こすと、胸を押さえ、ハアハアと息をした。呼吸が荒い。動悸が激しい。額からは大粒の冷や汗が……。元々抜けるように白かった肌がますます青白くなっていた。嫌な予感がする。

『急がなければ大変なことになる』

なぜかそう思った。しかも、シルヴィアのこういった第六感の外れたことがない。シルヴィアは今まで寝ていたベッドから跳ね起きるとドアに駆け寄り、ドアノブを捻り開けようとする。だが、ドアはびくともしない。

ガチャガチャガチャガチャと何度もドアノブを回してドアを開けようとするが、やはり開かない。

『どうして!』

シルヴィアは、ドンドンと激しくドアを叩いた。

「誰か! 誰か! いないの! お願い! 開けて! ここを開けて! お願い! 開けてー!ー!ー!」

力いっぱい叩くがびくともしないドアにとうとうすがりつき、シルヴィアはそのまま、その場に崩れ落ちた。

「お願い……」

シルヴィアの瞳から涙が零れ落ちる。

「ぐすつ。ぐすつ」

しばらくそのまま泣き続けていたが、時間が経つにつれて焦っていた心も落ち着きを取り戻し、自分が置かれた状況を冷静に考える余裕ができてきた。シルヴィアは流れ落ちる涙を手でぬぐいながら、閉じ込められた部屋を見回す。すると、ある事に気がついた。

『ここは……』

この部屋はシルヴィアの部屋ではなかったのだ。金や赤色が氾濫しているこの豪華な部屋は白を基調としているシルヴィアの部屋とはまるで対照的だった。そして、自分の衣服を改めて見てみた。

『このドレスは……』

真紅のドレスに黄金のネックレス。自分の服ではない。ディアナのだ。そのことに気がつくのを待っていたかのように突如、頭の中でフラッシュバックが起こる。

『お母様！そんな子など放っておいて早く逃げましょう！』

『さあ、そこをお退き！』

『今、伝令が来て、リリィアード軍が王都に通じる最後の関門を突破したそうです』

『ふん。元々、なりたくてあの男の妻になったのではないわ。わた

くしの命をかけるほど

の価値もない男など、最早どうなろうと知ったことではない』

『ディアナの衣装を身に着けさせ、部屋に閉じ込めておけ。わたくしたちが脱出するまでの時間ぐらい稼げるであろう』

「ディアナお姉さま……。お母様……」

シルヴィアは床についている拳を握り締め、覚悟を決めた。ここであきらめるわけにはいかない。シェファーズ王都は陥落寸前。夢が実現する可能性は高い。

『お願い。死なないでください』

シルヴィアは部屋をもう一度見渡し、脱出方法を模索した。しかし、その時、予期せぬことが起こった。シルヴィアの後ろにあるドアの隙間からもうもうと煙が入り込んできたのだ。

「きゃっ！」

シルヴィアは反射的にドアから飛びのく。煙がこんな所に入ってくる理由はただ一つ。この建物に火が放たれた。それしか、考えられなかった。

『一体誰が……。まさか、もうリリアード軍がこの王宮に入り込んだの？』

リリアードの仕業なら急がなくてはならない。

『どうにかして、ここから外に出なければ』

ぱつと後ろを振り返るとシルヴィアの眼に大きな窓が飛び込んできた。シルヴィアは飛びつくように窓を開け放つと、強い風がシルヴィアの髪をなびかせる。だが、意を決して下を見たシルヴィアはその場でへたり込んでしまいそうになった。地面までは遥か下。窓の下には一面の草原。地面まで遮る物は何一つなかったからだ。ここから脱出するのは絶望的。しかし、シルヴィアには落ち込んでいる余裕などない。呆然としてる間にも煙はどんどん進入してくる。

「ごほっごほっごほっ」

このままここにいれば、確実に死に到る。だが、ここから飛び降りても地面に激突して死ぬ。

『どうしても、あきらめるわけにはいかない。でも……』

シルヴィアはさすがのような思いで後ろを振り返るが、煙の量は先ほどの倍以上、増えていた。しかも、とうとう火が回り、ドアが焼け始めている。

「ごほっごほっごほっごほっ」

最早、逃げ道はどこにもなかった。

変革の波 嵐の一夜5

『私、ここで死ぬの？』

シルヴィアは死を覚悟した。そうしたら、急に意識がふわっと遠ざかろうとする。死神がシルヴィアをあの手と誘おうとしたその時。

「何をやってるんだ！ 早く飛び降りなさい！」

突然乱入してきた誰かの怒鳴り声がシルヴィアの意識を現実の世界に繋ぎ止めた。シルヴィアは驚きとともに窓の下を見る。そこにいたのは一人の男性。シェファーズ兵士の鎧をまとっていた。

「でもっ！」

「大丈夫！ 私が君を必ず受け止める！ だから、早く！」

そうは言われても、彼がいるところまではかなりの距離がある。恐る恐る窓辺に足をかけるが、どうしても飛び降りることができない。

「さあ、早く飛び降りるんだ！」

男の人は鎧を脱ぎ両手を広げ、シルヴィアを待つ。窓にかけた手も足も震え、背後からは火がバチバチといいながら近づき、シルヴィアに迫っていた。

一向に飛び降らないシルヴィアに再度男性が呼びかける。シルヴィアの体が恐怖で固まってしまっているのが、離れた距離からでも見て取れた。

「私を信じてくれ。君には傷一つつけないと約束する。勇気をだして。今から三つ数える。三つ数えたら飛ぶんだ！」

シルヴィアは青ざめながら大きくうなずく。

「いくよ。1、2、3っ！」

シルヴィアは目を瞑り、えいっとばかりに勢いよく飛び降りた。

ガシッ　ドサッ

次の瞬間、青年はシルヴィアを抱きとめ、反動で後ろにひっくり返った。ハアハアハアと互いに息が荒い。心臓が早鐘を打つ。二人は、しばらく、そのまま動けないでいた。しばらくそのままでいたが、だんだん動悸の激しさも和らぎ、シルヴィアはそーっと目を開けてみた。目の前には広い胸板。シルヴィアの身体は見ず知らずの男性の胸に抱きしめられ、自分はその人にしがみついていた。自然と顔が赤くなる。青年の右腕はシルヴィアの腰を抱き、左腕は頭をかばっていた。

「大丈夫かい？」

青年はその問いにシルヴィアがコクンとうなずくの見届けたのち、腹筋運動のように勢いよく上半身を起こした。

「きゃっ」

青年の腕の中にいたシルヴィアも必然的に身を起こすことになり、今度は、青年の膝の上に乗る格好となってしまうた。これ以上は心

臓がもたない。そう思ったシルヴィアは青年の胸元にすがりついたままだった手を放し、パツと立ち上がると、一步下がり、彼に礼を言った。

「助けてくださって、ありがとうございます」

すると青年は立ち上がり、何事も無かったかのように先ほど脱ぎ捨てた鎧を身にまとい始めた。

「無事で何より。怪我はないね」

「はい。ありがとうございます」

何度も礼を言うシルヴィアの耳元で青年がささやいた。

「礼を言うのであれば、私の顔を見て、言ってほしいな。それとも私は、あなたにとって顔を背けたくなるほどの存在なのだろうか……」

「いえっ。そんなことっ……」

恥ずかしくて顔が上げられなかっただけで他意はない。そういおうとしてシルヴィアは青年の顔を仰ぎ見た。が、青年の顔を見たとなん、口と目を大きく開き、そのまま停止してしまった。彼は確かに顔を背けたくなるような顔をしていた。

ただし、醜いからではなく、その美しさと圧倒的な存在感によってだ。戦場ゆえに金髪は輝きを失い、その手も顔も砂埃で汚れていたが、そのような些細な点など気にならないほど、彼は麗しい容姿をしていた。彼がたとえばシェファーズの下級兵士たちに配給される量産品の鎧も王侯貴族が着る鎧と大差なく感じる。ほうけているシ

ルヴィアを見て、苦笑いすると、彼はシルヴィアの手を取り、早足で歩き出した。

変革の波 嵐の一夜6

「あっあの」

彼のすばやい行動にシルヴィアが戸惑っていると、青年はこう言った。

「火の回りが速い。早くここから立ち去るべきだ」

青年は周りを気にして歩きながら、現在の状況をシルヴィアに教え、聞かせた。

「リリアード軍が王都に通じる最後の関門を突破し、王城の城門にまで達したことは知っているかい？」

シルヴィアの手がビクツと反応し、歩みが止まろうとするが、青年が立ち止まろうとしないので引きずられるように前に進む。

「その様子だと知らないようだね。まあ、無理もない。王族に見捨てられたのだから」

青年の言葉にシルヴィアは息をのむ。

「あの部屋は王妃アルグリアが息女、ディアナ姫のお部屋。火が放たれた後宮に似合わせドレスを着せられ閉じ込められていたということはどうだろうか？」

シルヴィアの手を握る青年の手に力がこめられる。

「君はディアナ姫の侍女ではないのかい？」

「……」

シルヴィアは、先を歩いていく青年の背中を黙ってみつめた。

「リリアード軍の先鋒は【鬼神アスター】。リリアードの第一皇子にして連戦連勝の無敗の將軍。シェファーズが勝つことは万に一つの可能性もない」

「そんなことは……」

「ある」

シルヴィアは叫んだ。

「なぜ、そう言い切れるのですか……」

青年はなおも歩きつづけ、シルヴィアに言った。

「さきほど、城門が破られ、王城にリリアード軍が流れ込んできた。狙いは国王だ」

シルヴィアは握られた手を逆に掴み返し、もう一方の手で彼の腕を掴み、立ち止まる。すると、青年はようやく、シルヴィアを振り返った。シルヴィアの顔は真っ青だ。

「今、なんて……」

青年はシルヴィア顔を見つめながら答えた。

「リリィアード軍が城門を突破し、王城に進軍した。シェファーズ国王を捕らえるつもりだ」

突然シルヴィアは青年の腕を振り切り、身を翻そうとした。

「どこへ行く！」

しかし、青年に手首と肩をつかまれ、身動きがとれない。

「いやっ！ 放して！ 私は行かなければならないの！」

腕をめちやくちやに振り上げるが、青年の身体はびくともしない。

「王城にいくつもりか？ どうして！」

「お願いだから、放して！ 行かせて！ お願い！」

シルヴィアは泣き叫びながら青年から逃れようとする。

「君は一体……」

その尋常ではない状態に押され、青年の手が一瞬緩む。

「放してー！ー！」

シルヴィアは機を逃さなかった。自分が持てる力すべてを使い青年を思い切り突き飛ばす。

油断していた青年は後ろに二三歩よろけ、シルヴィアはその隙に後

宮の庭園を突っ切っていった。

「待つんだ！　もう間に合わない。行くな！　行くなー！」

そう言って、青年はシルヴィアを追いかけた。いや、追いかけてようとした。しかし、入り組んだ庭園の中にシルヴィアの姿は消え、見失ってしまった。

「くそっ！」

青年は少し長めの髪をかきあげながら、周りをぐると見渡すが、霞のように掻き消えたシルヴィアの姿を見つけることはできなかった。

変革の波 嵐の一夜7

青年は手を額にあて天を仰ぐ。その表情は辛そうだ。そこへ、数人の兵士たちが青年の方へ歩み寄ってきた。皆、青年と同じシェファーズの鎧を着ている。そして彼らは一様に青年の前で膝をついた。

「イオル様。やはり、シェファーズ王妃アルグリア様と第一王女デIANA様はすでに王都を脱出した模様です。おそらく、すでにローザリオンの手の者と合流しているでしょう」

「そうか。ご苦労だった。」

青年イオルは額を押さえたまま答える。そして億劫そうに手を振り、彼らに下がれと合図を送る。それを見て、彼らは一斉に立ち上がる、庭園から去っていった。しかし、兵士の一人は立ち上がったまま立ち去ろうとしない。イオルは訝しげにその兵士を見た。

「どうした？ まだ何かあるのか？」

苦笑いを浮かべながら聞いた。

「その…。一つ気になることが」

「なんだ」

「王妃と第一王女の行方は、すぐにわかったのですが、王族の女性たちのなかで一人だけその行方が全くつかめない方がいらっしゃるのです」

「何！」

イオルの笑みが瞬時に消えた。

「後宮に住む王族の方々の保護は我々に一任されたのだぞ！　なのに、行方がわからないとはどういうことだ！」

兵士は慌てて跪き、イオルに許しを請うた。

「申し訳ございません」

「それで、所在がわからない方はどなただ」

「第二王女シルヴィア・ソナ・シェルフアー様です」

「シルヴィア姫」

イオルは国で仕入れた情報を思い返した。

「確か、シルヴィア姫はリリィアードの……」

イオルの言葉を兵士が引き継いだ。

「はい。わが国のソレンド男爵家の姫君がお産みになられた方です。年のころは十五歳。シルバールブロンドの髪にエメラルド色の瞳をした姫君だそうです。しかし、母君がお亡くなりになったあとは、現王妃アルグリア様の威光に押され、表舞台には一切出られなくなつたので、姫のお顔を知るものは、ほとんどいないそうです」

「十五。シルバーブロード……エメラルドの瞳！」

イオルは庭園のある一点をみつめた。それは彼女が消えた場所。

兵士はイオルのそんな反応に気づかず報告を続ける。

「一説には、王妃アルグリア様から、ひどい扱いを受け、王女とは名ばかりの生活をしていたと」

その言葉にイオルは驚き、目を見開いた。

「ただのうわさだと信じない者もいますが、私は真実ではないかと思っています」

「どうして、そう思う？」

「アルグリア王妃のリリィアード嫌いは有名ですし、王妃の気性の荒さは諸外国に鳴り響くほどですから……。アルグリア王妃を知る者は口々に言っています。『あの王妃ならば王女を虐待していても不思議ではない』と」

その報告に今までの疑問が一気に解決したかのように思えた。なぜ、シェファーズ国王に危機が迫っているという話にあれば取り乱したのか。なぜ、誰もいない、しかも恐らくアルグリアが命じてつけさせたであろう炎の中に一人取り残されていたのか。なぜ、ディアナのドレスを身に着けさせられ、ディアナの部屋に閉じ込められていたのか。イオルはそれらの状況に明確な殺意がこめられているようで、ずっと訝しく思っていたのだ。

『すべてが繋がった。ならば、彼女がしようとしていることは』

イオルは西にある建物に目を向けた。そこにあるのはシェファーズ
国王がいる王城だった。

変革の波 嵐の一夜8

シルヴィアは一心不乱に走っていた。

草木で顔や腕が切れようとも、つまずいて転んで足から血が出ようとも、かまわず走り続けた。

目指すは王城。

『お願い。間に合って!』

シルヴィアは薔薇のアーチをくぐると一旦立ち止まった。はあはあはあと荒くなった呼吸を整えると周りをうかがった。目の前には王城の入り口がある。ここは、もう王城の敷地内だった。シェファーズの王宮は政治を行い、尚且つ王の寝所がある王城と妃や姫たちが暮らす後宮とが別の建物にあり、その間には通路と迷路のように入り組んだ庭園がある。

シルヴィアはその庭園を突っ切って来たのだ。

オオオオオオオオオオオー

遠くで兵士たちの声や鎧兜、剣がぶつかり合う音が聞こえる。恐怖で足がすくむ。ここは、王城の裏口付近。下仕えの者が使う扉が見えた。リリアード軍の姿は見えない。シルヴィアはタイミングを計ると、一気に飛び出した。扉をすばやく開け、中に滑り込む。シルヴィアの心臓は爆発寸前のようにドキドキしていた。頭の中でここから王城内の地図を描く。

『ここは王城のはずれ、おそらく皆、謁見の間にいるはず。しかし、王城の中心部に向かえば、リリアード軍と鉢合わせしてしまう』

シルヴィアは考えた。元々、剣を持ったこともなく、人と争うことも苦手なシルヴィアが一人で戦場を走り回るのは、とても無謀なことで。運動が苦手で、足もそれほど速くはない。見つかったら終わりだ。

『そうだっ!』

シルヴィアは妙案を見つけた。リリアード軍が絶対に知ることはない、見つけることができない道が一つだけあった。それは、リリアードの王族のみが知る通路。

『謁見の間に通じる隠し通路を使おう!』

シルヴィアは祈りながらまた走り出した。

『死なないで!お父様!』

変革の波 嵐の一夜9

【鬼神アスター】は血に飢えていた。大国の皇子という立場。無敗の將軍という立場。一国を動かす力を持っているにも関わらず常に満足できず、彼はいつも何かに飢えていた。

そんなアスターが最近興味を持ったのが、小国シェファーズ。【天の花園】と呼ばれる平和な国。大国リリアードとローザリオンにはさまれていながら、ここ数百年戦争とは無縁だった。豊かな大地と美しい湖を持つシェファーズは大いに利用価値がある。しかし、これまでどの国もシェファーズに攻め込むことはなかった。しかも、シェファーズは目立った外交も取っておらず、することといえばリリアードとローザリオンから妃を娶るぐらいだ。

なぜだかわからないが、その『のほほん』とした雰囲気のアスターの癪に障った。なぜだかわからないが、無性にその国を踏みにじりたくなった。そこでアスターは父である皇帝陛下に一つ進言を試みることにした。

「皇帝陛下。シェファーズへの進軍を許可願います」

唐突に発せられた第一皇子の言葉。御前会議は混乱した。その様子をリリアード帝国皇帝ルドルフは面白そうに眺めていた。

「進軍するということはシェファーズを征服するということか？」

「はい。陛下」

「理由は？」

「いくつかあります」

その会議に出席していた臣下一同は無敗の將軍の突然の進軍要請に驚き、ざわつきながら、二人のやり取りを見守っていた。

「まずシェファーズは世界有数の穀倉地帯。一年中温暖な気候で年二回も麦が収穫できる。リリィアードは現在シェファーズから穀物を買いつけていますが、彼らに支払う金も決して安い値段ではありません。民の下に届くときには人件費・運搬費込みで庶民にはかなりの金額。ならば、いつそシェファーズを征服したほうが、今後のためにも良いと思われます」

「ふむ。一理あるな」

「第二がローザリオンです」

アスターの言葉に反応し、一瞬にしてその場の緊張が高まった。

「ローザリオン？」

ルドルフの声も表情も穏やかだが、眼は笑っていない。
アスターは気にせず話を続けた。

「現在のシェファーズ王妃のことはご存知ですか？」

「余を馬鹿にしているのか？　ローザリオンの名門マルリオーザ侯爵家の娘であろう？」

「はい。現ローザリオン王妃の姉にあたるお方です」

「で？」

「その王妃が最近、頻繁にローザリオンに密使を送っていることをご存知ですか？」

ルドルフの片眉が跳ね上がる。

「ほう。それは面白い」

「わが手の者の話によりますとどうやら王妃は縁談の話をローザリオン王室に持ちかけたそうです」

「相手は？」

「ローザリオンの第二皇子です」

アスターは声を張り上げ、言った。

「シェファーズ王女ディアナの婿としてシェファーズ王室に入って欲しいと」

アスターがもたらした情報は臣下にとって寝耳に水の話だったようで、先ほどよりもざわつきが増した。

「これが、シェファーズ進軍要請の最大の理由です」

そう、アスターはうそぶいた。

こういえば、必ずシェファーズ侵攻を命じられると分かっていたからだ。

ディアナは現在シェファーズの第一王位継承者だ。しかも、現王妃が母ということで血筋的には何の問題もない。それにローザリオン王室という後ろ盾がある。このままいけばディアナの女王即位は確実だ。

そんな彼女の婿となるということは、つまりローザリオンの皇子が共同統治者となり、王子が生まれれば、その子があとを継ぐ。ローザリオン王室とのつながりが強くなるのは確実だ。

小国とはいえシェファーズがローザリオン側につくとなると大国とはいえリリアードは苦しくなる。ここ数十年でリリアードとローザリオンの仲は悪化の一途をたどっているからだ。一応国交はあるが、いつ戦になってもおかしくはない状況に陥っていた。ルドルフはため息をつくとアスターに言った。

「わかった。進軍を許可しよう。皆の者異存は？」

周りに控えている臣下たちは無言のまま、異を唱える者は誰一人いなかった。その表情はむしろやる気に満ちていた。ルドルフは立ち上がると皆に宣言した。

「第一皇子アスタリオス・ラ・ジェラルドにシェファーズ侵攻軍総司令官を任す。シェファーズを我が神聖リリアード帝国の支配下に！」

変革の波 嵐の一夜10

そしてシェファーズに奇襲をかけ、国境を脅かして三日。城門を突破してから三時間。アスターは飽いていた。

『もう少し楽しめると思っていたんだがな』

アスターは剣を振るい、更なる血を求め、王城の中心部に向かっていった。

「奴らを行かせるな！」

シェファーズの兵士たちはアスターの進路を阻もうと立ちはだかるが、百戦錬磨の戦士でもあるアスターの前では赤子同然だった。ある者は首を、ある者は胴を切られ、また、ある者は心臓を一突きにされた。アスターの剣は数多の人間の血を吸い、不気味な黒い光を放っている。そして、最後の一人を倒すと大きな扉を守る門番は誰もいなくなった。

アスターは剣を鞘に戻すと両手でその大きな扉を開いた。そこはシェファーズ国王が諸外国からの使臣を迎えるために使われる謁見の間であった。アスターはリリィアードの兵士を従え、中に入るとニヒルな笑みを浮かべながら軽くお辞儀をした。

「お初にお目にかかります。国王陛下」

玉座に座っている国王はゆっくりと立ち上がり階下にいるアスターの所へ降りてきた。

「私もあなたにお会いできて光栄だ。アスタリオス皇子」

そういうと国王はアスターに微笑んだ。

そこには、アスターに対する憎しみも恐怖も何もなかった。あるのはすべてを悟りきったかのような笑みのみ。アスターは不愉快そうに眉間に皺をよせた。その国王の態度が無性に腹立たしかったのだ。そして、彼を無性に貶めたくなった。

「シェファーズ国王陛下お付きの者はどうしたのですか？」

謁見の間に国王を守るべき臣下が一人もいない。彼らに見捨てられたという事実をどう受け止めているのか、アスターは嘲笑を浮かべながら国王に聞いた。すると国王は、何でもないことのように答えた。

「暇を出したのです」

予想外の切り返しにアスターの片眉がピクリと動く。

「暇……ですか？」

「そうです。最早、私に誠心誠意仕えたとして、彼らの働きに見合った給金も払えませんか」

その『のほろん』とした笑顔にアスターはいらだった。こんな人間は初めてだった。

今まで、アスターに殺された人間は悪鬼のごとくその姿にひれ伏し、皆跪き、懇願した。

命だけは助けてくれと。

「国王陛下、あなたは今、ご自分がどういう状況に置かれているのか分かっていらっしゃるのですか？」

アスターは国王を睨み付けながら問うた。国王は相変わらず穏やかに笑っていた。

「わかっていますよ」

次の瞬間アスターは鞘から剣をはずすと国王の首筋に剣を突きつけた。

「では、私が今から何をしようとしているかも、お分かりですか？」

その抜き身の刃と同じように鋭く輝くアスターの瞳を見つめながら国王は言った。

「ええ」

アスターは黒剣の柄をぎゅっと握り締めた。

『本当にわかっているのか。この男は』

アスターの苛立ちらは最高潮に達した。アスターは思った。シェファーズ国王は、シェファーズそのもののような男だと。平和に慣れ、安眠をむさぼり、ただただ生きるだけの生活をしてきた男。物心ついたときから、生きるか死ぬか、やるかやられるかといった殺伐とした人生を歩いてきたアスターとは正反対にいる存在。一点の穢れもないような雰囲気すべてがアスターの癪に障った。冷徹な瞳を向け、アスターは宣告した。

「思い残すことは？」

すると、国王は真剣な目でアスターを見た。

変革の波 嵐の一夜11

「一つだけ」

「それは？」

アスターは先を促した。

「我が娘。シルヴィアの命」

「シルヴィア？」

その名を聞いて思い出した。

いつもならアスターに任せた事にはめったに口を挟まない父ルドルフが今回に限って、必ず守るようにと言ってきたことが一つだけあったのだ。

『アスター。第二王女シルヴィア・ソナ・シエルファーは必ず保護するように』

父の言葉を思い返したアスターはうなずいた。

「シルヴィア姫の命は保証する」

すると国王は安心したように微笑むとその場に跪き、首を差し出した。アスターが剣を構える。

「最後に聞く。言い残すことは？」

国王は静かにこう答えた。

「怨みは捨て、幸せになりなさい」

言い終わるとアスターの剣が無情にも振り下ろされた。

ザシュツ

国王の返り血がアスターの頬をぬらす。

「いやーーーーー!」

突如若い女の悲鳴が部屋中にこだました。

振り返ると、そこには一人の少女が立っていた。

すすや埃で汚れた身体。あちらこちらが擦り切れ破れている真紅のドレス。みすばらしい一人の少女にアスターの眼は釘付けになった。しかし、少女の視界にアスターは入ってなかった。エメラルドの瞳から零れ落ちる涙を拭いもせず、少女は一步また一步こちらへと近づいてきた。少女はゆっくりと膝をつき、シェファーズ国王の亡骸に手を置いた。国王の髪をかきあげ、愛おしそうに頬をなでると、大きな声で泣き叫んだ。

「いやっ…。死なないで……。死なないでください。お父様っ!」

その言葉にその場にいた誰もが驚いた。アスターは国王の亡骸に取りすがる少女の手を乱暴に取ると、少女の顔を無理やりこちらに振り向かせた。

「もしや、お前がシェファーズ第二王女シルヴィアかっ!」

アスターの顔を認識するとシルヴィアはアスターの手を打ち払った。

パンツ！

「触らないで！」

それは引っ込み思案で大人しく、人と争うことが苦手ないつものシルヴィアとは思えない行動だった。シルヴィアは涙にぬれた眼でアスターを睨み付けていた。女性にそんな仕打ちを受けたことがないアスターは驚きに眼を見張る。その場はシーンと静まり返った。

徐々にアスターの瞳に力がともる。二人は少しの間、にらみ合った。そして、先に動いたのはアスターだった。シルヴィアの首を掴むとそのままシルヴィアの体を引っ張り上げた。

「いい度胸だ」

「くっ……」

足は床についているが首を掴まれているのでとても苦しそうにしていた。しかし、その瞳の強さは変わらない。

「人殺し」

憎しみをこめた一言だった。アスターは口の端だけを持ち上げて笑った。

「おもしろい」

そして、彼女の首から手を放すと、そのまま自らの肩にシルヴィア

を乗せ、担いだ。

「なっ！」

突然のことにシルヴィアは驚き、手足をばたつかせ抵抗した。

「いやっ。何をするの。下ろして！」

しかし、そんなシルヴィアの精一杯の抵抗もアスターにとっては子猫があばれている程度のものだった。

「下ろして！ 下ろしてよ！」

アスターは自分に付いてきた副司令官アービスのほうをみると、あの命令を下した。

「あとのことは任せた。俺はこの王女に用がある。誰も俺たちの邪魔をしないように見張っておけ」

「はっ！」

言うだけ言うとアスターはそのまま謁見の間を通り過ぎ、宮城の奥へと進んだ。その先にあるのは王の寝室。それに気づいたアービスは一つため息をつくど、シェファーズ国王の亡骸に歩み寄り、彼の埋葬準備に取り掛かった。

変革の波 嵐の一夜12

「下ろして！ 下ろしてよ！」

シルヴィアは大声でわめき散らし、アスターは右腕に漆黒の大剣を左肩にシルヴィアを担いだ状態で颯爽と歩く。回廊にはシルヴィアの声とアスターの靴の音だけがこだましている。アスターは目的の場所にたどり着くと、勢いよく足で扉を蹴り飛ばした。中に入ると、シルヴィアの体をベッドの上に乱暴に放り投げる。

「きゃっ」

シルヴィアの身体はベッドの上で跳ね、アスターはベッドの上に身を乗り出す。シルヴィアはすかさず身を起こし、彼を睨み付けた。すると、彼は笑っていた。口の端だけを持ち上げ、笑っていた。そんなアスターにシルヴィアは我慢ならなかった。娘の目の前で、その父を殺したことに、微塵も後ろめたさを感じていない彼の反応に。シルヴィアは自分のその怒りと憎しみを自らの手に込め、近づくアスターの左頬を力いっぱい叩いた。その勢いでアスターの顔は横を向く。

「ハアハアハア」

シルヴィアの荒い息遣いだけが木魂する。1拍の後、黒い瞳から放たれた一筋の刃のような視線がシルヴィアの心臓を貫いた。

ゾクッ

その眼差しに射抜かれ、シルヴィアは氷の彫像のように、動けなくなる。

「あっ」

恐怖に震え、言葉をなさぬ声が漏れた瞬間、アスターの手がシルヴィアの身体を引き倒し、片手でその場に押さえつける。そして、シルヴィアの顔の脇を黒い塊が通り抜けた。

ドカッ

一瞬の出来事だった。

シルヴィアの髪が数本犠牲になり、ベッドに銀糸の髪が散らばる。シルヴィアは、指先すら動かすことができず、固まっていた。目の前に突き立てられたのは父王の命を奪ったあの漆黒の大剣。その刃には血がこびりついたままだった。あまりの恐ろしさに声も出ず、シルヴィアはただただ震えるばかり。

シルヴィアの体を押さえつけていたアスターの手が動く。アスターはシルヴィアの胸元を両手で握り締めると、左右に思いっきり引っ張った。ビリッとドレスが破れる音がする。

シルヴィアは恐怖におののきながら、からくり人形のようにゆっくり、そしてどこもなくアスターの顔を仰ぎ見た。何の感情も見えない冷たい顔。絶対零度の瞳。シルヴィアの首筋をなでる手袋に覆われた冷たい手。頭からつま先まで黒一色のアスターは、まるで彼女に手にする剣、そのものようであった。触れれば切れる。そんな抜き身の剣のような…。抵抗する力を失い、ベッドの上に投げ出されたシルヴィアの体を見下ろしながら、アスターは鎧を脱ぎ捨てた。手袋を放り投げ、ブーツを脱ぎ捨てて…。

シルヴィアはその様を黙って見守ることしかできなかった。アスターの上半身が徐々にシルヴィアの体に近づいてきた。アスターの手が彼女の衣服の下に潜り込む。

「・・・何をするの？」

そのアスターの手の動きが一体何を意味するのか、シルヴィアには全く理解できなかった。

シルヴィアに、その方面の知識がないことが今の一言でアスターにはわかった。フツと暗い笑みを浮かべるアスター。

「おもしろい」

そう静かに言うと、アスターはシルヴィアに襲いかかった。残ったドレスを引きちぎられ、シルヴィアの体は嵐にあったかのように翻弄された。

「何？ やっ。いやっ。やめてっ。やめてっ」

シルヴィアの口から漏れる弱弱しい懇願は、アスターの嗜虐心を煽るだけだった。

そしてアスターはシルヴィアの体を勢いよく貫いた。体がバラバラになるような痛みにシルヴィアは目を見開いた。

「かはっ」

シルヴィアの口からは言葉にならない悲鳴が聞こえる。そんなシルヴィアの反応にアスターは満足そうにしていた。容赦なくシルヴィアの体を激しく揺らし、翻弄していった。

「あつ。いやっ。いやっ。やめてっ。もうやめてっ。おねがい」

シルヴィアの瞳から涙が零れ落ちる。

しかし、アスターの動きは激しさを増していった。シルヴィアが泣けば泣くほど酷くなっていく。シルヴィアにとって、その時間は拷問のようなひと時だった。

「いや。やめて。やめて。いやー！ー！」

「くっ」

シルヴィアの一際大きな悲鳴を聞いたとたん、アスターの顔がゆがむ。

「あー！ー！ー！」

そして、シルヴィアの体が弓なりにになると、アスターの腕が腰を抱き、彼の腕にきつく抱きしめられた。だが、シルヴィアにはそんな些細なことに気づく余裕などありはしなかった。目の前に火花が飛び散ったような感覚が襲い、シルヴィアの精神は持ちこたえることができず、そのまま、シルヴィアはアスターの腕の中で意識を失う。

「ふははははは。あーっはっはっはっはっ」

そして、アスターはシルヴィアを抱きしめながら、勝ち誇ったかのように笑った。

『シェファーズ国王。冥途で見ているがいい。お前の大切な娘が俺

に汚され、墮ちていく様を』

そして姫君は捕らわれた。

漆黒の鬼の腕の中に。

変革の波 嵐の一夜13

イオルは焦っていた。

しかし、自分に付き従ってきた部下の手前、表に焦りを出すことはできなかった。イオルの脳裏には少女の泣き顔が焼きついて離れないでいる。

『姫…』

自然と歩くスピードが速まる。シルヴィアを見失ったあの庭園から急いで王城に向かったが、思った以上に時間がかかってしまった。

イオルは謁見の間へと急いだ。すると、前から粗末な荷車を引いた兵士たちが歩いてきた。

すれ違いざま、濃い血のにおいを感じ、振り向いた。

「待て」

イオルは彼らを引き止めた。

「あつ。イオル様」

近づいてみると荷車に横たわる亡骸は、身分の高い男性のものであった。見事に首を一閃され、一撃で息の根を止められている。この傷なら無駄に苦しむことなく天へと昇ったであろう。王城から運び出される身なりの良い中年男性。誰なのかは一目瞭然だった。そして、彼の命を誰が断ち切ったのかも一目瞭然だった。イオルの顔がこわばる。

「アスターは…」

「はい？」

兵士が聞き返す。

「アスター……。いや、総司令官はどこにおられる」

兵士はイオルから気まずそうに視線をはずす。その反応だけで何か想定外のことが起こったのだと、瞬時に理解できた。イオルは謁見の間がある方へと視線を向けると、早足でその方向へ向かっていった。

「あのっ。ちょっ。イオル様！」

呼び止める兵士たちを置き去りにして、早足はいつのまにか駆け足となっていた。イオルの耳には何者の声も最早届かなかった。彼の頭を占めるのはただ一人。

『姫』

燃え盛る炎の中、震えていた少女。掴めば折れてしまうような華奢な身体。すすで汚れた白い肌と涙にぬれたエメラルドの双眸。彼女の姿を求めてイオルは走り出した。

バタンッ

謁見の間の扉を両手で開け広間に飛び込む。

ただならぬイオルの様子に、そこから兵士たちに指令を出していた副司令官アービスが驚いたように、こちらを向いていた。

「これは、イオル様。どうなされたのですか？」

手にしていた書類を側近に手渡すとイオルに対して敬礼した。イオルはツカツカと歩み寄るとアービスに尋ねた。

「アスターはどこにいる」

その言葉にアービスはハッと息をのむ。

「それは……」

アービスも先ほどの兵士同様、気まずそうに視線をそらす。つとめて冷静なふりをしてイオルは再度アービスに尋ねた。

「アスターに、総司令官に、今すぐ報告しなければならぬことがある。居場所を教えてください」

アービスは困ったように答えた。

「命令されているのです。呼ぶまで誰も邪魔をするなと」

イオルは首をかしげた。

「邪魔？ アスターは何をしているのだ？」

アービスは、重い口を開いた。

「実は……」

アービスの口から飛び出した名前にイオルは驚愕した。そして、彼の話を聞くや否や制止するアービスの呼びかけを無視し、王の寝所に通じる扉を乱暴に開いた。とても嫌な予感がした。何故だか分からないが、とても嫌な予感だった。先ほどのアービスの言葉が頭の中を駆け巡っている。

『実は、シェファーズ国王がアスター様のお亡くなりになったところに、第二王女シルヴィア姫が現れまして、アスター様が姫に用があるとおっしゃられ、お二人で王の寝所に……』

イオルも鈍感な男ではない。若い血気盛んな男が、若い女を寝所に連れ込むという意味がどういうことなのか分かる。だが信じたくなかった。いくら冷酷非情な鬼神と言われているアスターとはいえ、かりにも一国の王女だった少女に、そんな無体なことをする人間ではないと信じたかった。そして見たくなかった。普通の雨風にも耐え切れぬような儚い雰囲気を持った少女の、羽をもがれた姿など。しかし、そんなイオルの願いは崩れ去った。寝所の扉がかすかに開いている。そこから、漏れ聞こえる音と声に絶望した。

「いや。やめて。やめて。いやーーーーー！」

イオルは激しく脈打つ心臓を押さえながら、扉のノブに手をかける。

「あーーーーー！」

一際大きな少女の悲鳴を耳にしながら、ゆっくりと開けた。

「ふははははは。あーっはっはっはっは」

目の前に広がる光景にイオルは青ざめた。

そこには少女の白い体に腕を回し、抱きしめる漆黒の皇子の姿。

「アスター」

彼の名をつぶやくと、アスターの視線がイオルを貫いた。そこには深い深い深遠の闇と、なんともいえない恍惚とした光を放っていた。

そして、アスターはイオルに向かってにやりと笑った。

「よう。遅かったな」

目覚めの朝

第二章 目覚めの朝

チュンチュンチュンと小鳥がさえずる声が聞こえる。

「ん……」

カーテンの隙間から差し込む光に照らされ、シルヴィアの意識は覚醒した。手を目の前にかざし、光を遮断しようとした。シルヴィアのまぶたがゆっくり持ち上がる。眩しそうに眼が細められた。

「ここは…」

まだ頭がぼうつとして意識がはっきりしない。上半身を起こし、片手で顔を覆う。

体中の節々が痛い。腕も足も肩もこわばっていた。

シルヴィアはふと突き刺さるような視線を感じた。そちらの方へ視線をめぐらす。

ベッドの傍に置いてある椅子に座っているアスターは足を組み、肘掛に腕を置き、そこに頭をもたれかけていた。

そしてシルヴィアの視線は、その氷のような視線とぶつかり、碎けた。

『あつ。いやっ。いやっ。やめてっ。もうやめてっ。おねがい』

シルヴィアの体が小刻みに震える。

それを見たアスターは笑った。

「俺を誘っているのか？」

シルヴィアは眉をひそめた。アスターが何を言っているのか理解できなかったからだ。

アスターは口の端を持ち上げ、フツと笑う。彼の視線がゆっくりと下にずれる。それにつられシルヴィアの視線も下がる。

「っ！ きゃー！ ！」

慌ててずり落ちたシーツを引き上げ、アスターの視線から身体を隠した。シルヴィアの頬も首筋も朱色に染まった。朝の光の下、一糸まとわぬ姿をさらけ出してしまった。

アスターが立ち上がると、その気配を感じ取ったシルヴィアの肩がビクツと動く。

アスターがどんどん距離を縮め近づいてくる。心臓がドクドクと脈打つ。シルヴィアはアスターに背を向けたまま動けないでいた。

ベッドがギリときしむ。アスターは意地悪そうな笑みのままベッドに腰掛けると、シルヴィアの髪をかき上げ、その朱色に染まった首筋に口づけを落とした。

「ひゃっ」

シルヴィアは口を押さえた。しかし、シルヴィアの可愛らしい桃色の唇からこぼれた甘い声を消し去ることはできなかった。

「何を恥ずかしがっている。今更だろう？」

アスターは完全におもしろがっていた。

「放してください」

シルヴィアは震える声でアスターを拒絶する。

「もう、気が済んだのではありませんか？」

シルヴィアは青ざめた顔でアスターを見る。

「殺してください」

アスターの顔から笑みが消える。

バシッ

頬をたたかれ、シルヴィアはベッドに倒れふす。アスターは肩を掴み、シルヴィアを仰向けに転がした。そして、彼女の両手首を握り締めた。冷たく暗い双眸。その瞳に向かって再度言う。

「殺してください。お父様を殺したようにっ」

感情が高ぶり、シルヴィアの瞳はその色を濃くする。まるで緑色の炎のような眼光にアスターは釘付けになった。数秒間のにらみ合いの末、先に動いたのはやはりアスターだった。にやりと笑ったアスターの顔が近づいてくる。二人の顔が重なり合うまであと数センチ。自然と体に力が入る。

唇にアスターの吐息を感じ、シルヴィアは拳をぎゅっと握り締め、顔をそむける。すると、アスターの動きが止まった。それから、いきなり方向転換したのだ。

「やつ」

アスターの唇がシルヴィアの首筋に喰らいつく。

一回。二回。三回。

場所を変え、方向を変え、吸い付く強さを変えながら、シルヴィアの体に己の足跡を残していった。

「っ……」

唇からこぼれそうになる甘い声を聞かれぬよう、必死で口を閉ざし、両手でふさいだ。気配でシルヴィアの意図を察したアスターはシルヴィアの胸元から少し唇を離すと、にやりと笑った。心は拒んでいるのに、体は違った。自分の思い通りにならぬ体の反応にシルヴィアは戸惑っていた。そんなシルヴィアの心の内はアスターに簡単に見破られていた。

シルヴィアの体に触れるアスターの手が妖しく動く。

「あっ」

彼の手で与えられる感覚は、ふさいでいた唇の隙間からシルヴィアの艶めいた声を引き出していった。

「んっ。あっ。やつ。はあ」

シルヴィアの反応に、またもにやりとすると、それはどんどん激しくなる。

「んんっ。やあー！」

『どうして…』

自分自身の心を裏切り続ける己の身体に涙があふれ、シルヴィアはアスターの顔を仰ぎ見る。口元は笑みを浮かべているが、その瞳は冷ややかで、まるでシルヴィアを蔑んでいるようだ。

そんなアスターの表情にシルヴィアは我慢がならなかった。

「いや！ 触らないで！！」

渾身の力でアスターの身体を押し返した。

そんな彼女の反応に、それまでアスターに張り付いていた笑みが消え、氷のような冷ややかな視線がシルヴィアを上から貫く。

「おまえは、どうやら自分の立場が分かっていないらしい」

「立場？」

「お前を生かすも殺すも俺の意思次第」

シルヴィアの脳裏にアスターの黒い剣の刃が浮かび、唇が震える。

「ならば、殺してください」

震えながらも虚勢をはろうとするシルヴィアの言葉をアスターは鼻で笑った。

「やはり、分かっている。お前は俺の所有物だということが」

「どういう……ことですか？」

「お前に選択権はない。俺の許しがあればお前は死ぬことすらできない」

ゆっくりとアスターはシルヴィアの耳元に口を近づけ、そして囁いた。

「もし、お前が俺の意に反することを行えば、シェファーズ国民の命はないと思え」

シルヴィアは大きく目を見開いた。

「そんなこと…」

「できないと思うか、では試してみるか」

「やっ、やめてください!」

ベッドから出ようとするアスターの腕にすがり、シルヴィアは引き止める。アスターは相変わらず意地の悪い表情で話を続けた。

「俺の気が済むそのときまで、お前は俺を慰める小鳥となれ。その務めを果たせば、シェファーズの民にリリィアード本国の民と同様に扱ってやる。悪い話ではないだろう?」

そういうと、シルヴィアの青ざめた顔を愛おしそうになでる。しかし、シルヴィアの身体はぶるりと震えた。そのあまりにも冷たい彼の手に。

「返事は?」

シルヴィアに選択の余地はなかった。

「…お受け……いたします」

その言葉を受け、アスターはかぶっていた掛け布団を剥ぎ取ると、ベッドの脇に置いてあったある物を取りにいった。

ジャラツという音とともに現れたのは銀色に輝く銀の鎖。その先には足枷がついていた。シルヴィアの細い足首を掴むと、それを足にはめ、鍵をかけた。その鍵はネックレスになっていて、アスターは見せびらかすように首にかけた。

「契約成立だな」

そして、鎖につながれた足を手にとると、そこに口づけた。それより三日間、朝も昼も夜もアスターの腕から逃れられず、シルヴィアは憎い仇に抱かれ続けるしかなかった。

目覚めの朝2

何度目の朝だろうか。シルヴィアは目覚めた。

目覚めるときはベッドにいつも一人。こういうとき、改めて思い知らされる。私には、本当にこの程度の価値しかない。

シルヴィアは床に落ちていた白いガウンを拾い上げ、身に着ける。足を床に置くと、ジャラツと音がした。足につながれた鎖の音だ。銀の鎖はベッドの柱に繋がれていたが、部屋の隅から隅まで歩くには十分な長さだった。

それから、シルヴィアはバルコニーに出た。歩くたびに、音になる。音が鳴るたびに、惨めな気分になり、気分が落ち込む。

朝もやの中、緑が生い茂る庭園を眺めた。朝日が昇り、光がシルヴィアを照らし始める。爽やかな風がシルヴィアの髪をなびかせる。

『お父様。お母様。今日先生から新しいお歌を教わったの。聞いてくださいませんか』

幼き自分の声がどこからともなく聞こえてくる。

昔、母が生きていた頃、父と母とよくここから庭園を眺め、歌が大好きな両親のために歌を歌っていた。ここは、シルヴィアの幸せの象徴：だった場所。人に蔑まれることも貶められることもなかった。父と母の愛情を胸いっぱい感じていたあの頃。

『戻りたい』

シルヴィアは苦しそうに胸を押さえる。すると、一羽の小鳥がバルコニーの手すりに舞い降りた。

つぶらな瞳でシルヴィアをじっと見つめる。シルヴィアは微笑むと、

小鳥に向かって手を差し伸べた。その小鳥は、シルヴィアの指にちよこんと乗る。そして、シルヴィアの心を慰めるかのごとくさえずった。

「何？」

「チュンチュン」

羽をばたつかせ、シルヴィアに何か訴えている。シルヴィアは小鳥に話しかけた。

「歌を歌えと言っているの？」

「チュンチュン」

錯覚だと分かっている。でも、シルヴィアには小鳥が頷いているように思えてならなかった。

『歌って…みようかな？』

シルヴィアは一度深呼吸をし、微笑むと、歌を歌い始めた。高く低く。心の赴くまま。透き通るような歌声が響き渡る。

『シルヴィアの歌声は人々の心を癒す天使の歌声だな。とても美しい』

父はよくそう言って、シルヴィアを褒めてくれた。

『お父様……』

歌を歌うことは昔から大好きだった。歌を歌っていると、心にこびりついた汚いものが剥がれ落ちるように感じる。歌を歌っている時だけが、母が亡くなって以来、シルヴィアにとって唯一の安らぎとなっていた。

シルヴィアの歌声に、どこからともなく鳥たちが集まってくる。まるでシルヴィアの歌を聞きに来たようにシルヴィアを取り囲んだ。そこだけ別の世界のような。一点の穢れもない美しい世界。

シルヴィアが一心不乱に歌を歌っていると、背後でキィというバルコニーの入り口が開く音が聞こえた。その音にシルヴィアの肩がビクツと震え、人の気配に驚いた鳥たちが一斉に飛び立つ。シルヴィアはゆっくり後ろを振り返るが、鳥たちの羽が舞い散り、その人の顔がよく見えない。

「誰？」

シルヴィアは胸元で両手を握り締めた。

どうやら男性のようだ。彼はゆっくりシルヴィアに近づいてきた。そして、その人の顔を見たシルヴィアは目を見開いた。

「あなたは……」

彼が口を開く。

「姫」

彼の手が持ち上がり、シルヴィアの方へと伸ばされた。次の瞬間、シルヴィアはその手を打ち払っていた。

「いやっ」

金髪碧眼の彼の手を。自分の目の前に突然現れたことで、彼の正体が瞬時に分かってしまった。

「姫……」

心に衝撃を受けたイオルは打ち払われた手を引っ込めることも、伸ばすこともできなかった。

シルヴィアはイオルから視線をそらす。

「頭では、分かっているのです。あなたが悪いわけではないと」

イオルは黙って、シルヴィアの言葉を聞いている。

「これは、国同士の戦争。個人の意志などないに等しい。それに、あなたは私の命の恩人。助けて頂いて感謝しています。ですがっ」

瞳に涙を浮かべ、イオルを見る。

「どうしても、許すことができないのです。あなた方を」

胸を押さえ、辛そうに搾り出すような声にイオルの胸もまた痛んだ。

「お願いです。どうか、出ていってください。リリアード第二皇子イオルバーン・ド・ジェラルド様」

アスターは、シルヴィアが他人と接触するのを極端に嫌い、使用人も必要なとき以外はここに立ち入らせない。つまり、ここに入れるのはアスターに入室許可を取れるほどの人間。

加えて、金髪碧眼の美青年ということから、考えられる彼の正体は、

アスターの弟である【金の貴公子】イオルしか考えられなかった。

シルヴィアの鋭い考察と拒絶にイオルはフツと辛そうに笑うと、もう一方の手に持っていた花束を差し出す。

「これを、姫に。少しでも、姫の心の慰めになればと……。これだけは受け取って頂けませんか？」

それはなずなの花束だった。シェファーズの国花。しかし、シルヴィアは花を見つめたまま動こうとしない。イオルは歩み寄ると、シルヴィアの手を取り、彼女の手小さな花束をのせた。

自分の手の中にある花を見つめ続けるシルヴィア。そして、イオルはそっと部屋を出て行ったのだった。

そよ風がシルヴィアの長い髪をなびかせる。

そしてシルヴィアは、しおれた花のようにならずとうつつむいたままだった。

目覚めの朝3

ドカツ

部屋を出たイオルは壁に拳をたたきつけた。怒りで握り締めた拳が震える。

「くそっ！」

髪の間から見え隠れする首筋に散らばった赤い花卉。ガウンの裾から伸びる銀の鎖。

アスターがここまでするとは思わなかった。

前方からコツコツコツと靴の音が近づいてくる。そして、イオルの前で止まった。

イオルは顔を上げるとアスターに掴みかかった。

ドンッ

そしてそのまま、壁に押し付ける。

「何を考えている」

射殺してしまいそうな眼でアスターを見るが、アスターの表情から感情は読み取れない。

「まだ、十五になったばかりの少女にする仕打ちか！ あれが。ましてや彼女は一国の王女。敬意を払い、接するべきだろう！」

怒りに震えるイオルをアスターは鼻で笑った。

「確かに、あれは王女だった人間だ。だが、今は違う。シェファーズは滅んだ。昔から滅ぼした側の男が滅ぼされた側の女を略奪してきた。略奪された女はその男のものになる。あの女も同じだ。あの女は俺のもの。どう扱おうが俺の勝手だ」

「アスター！」

すると、アスターは胸元を握り締めるイオルの手を打ち払った。

「偽善者ぶるのはやめろ！」

「何？」

「悔しいんだろう？ あれを奪われて」

アスターの言葉にイオルはハツとする。

「初めてあれを抱いた日のお前の顔」

アスターはクックックと笑った。

「お前は、ショックで青ざめていたが、その瞳にはまぎれもない俺に対する嫉妬の心が宿っていたぞ」

「そんなことは」

「ない。というのか？」

アスターは何もかも見透かしているような目をしてイオルを見つめる。

「イオル。お前は俺の双子の弟だ。だから、わかる。お前も俺と同じ。興味のない人間のためにわざわざ時間を割くほどお人好しではない。しかし、お前は俺と違う。お前は人を愛することができる男だ。お前は、あれを愛しているのか？」

淡々と話すアスター。イオルは考えるが返す言葉が見つからない。

「イオル。あれに会いたければいつでも会いにくるがいい」

予想外の言葉にイオルは驚いた。

「アスター」

そして、そのままシルヴィアの部屋へと向かった。その背中にイオルは問いを投げかける。

「お前は、姫を愛しているのか？」

アスターはピタリと歩みを止めた。

「俺には、そんな甘ったるい感情などない」

振り返ったアスターの瞳は絶対零度の氷のように冷ややかだった。

「だが、イオル。覚えておけ。あれは、俺の小鳥。俺の所有物だということ」

そうとうとアスターはイオルの前から去っていった。イオルはその場で立ちすくむことしかできなかった。

目覚めの朝4

アスターは、イオルを置き去りにしてシルヴィアの部屋を訪れた。中に入るとシルヴィアは椅子に腰掛け、小さな花瓶に生けた花を見つめていた。なずなの花。シェファーズの国花。

その花を見たアスターの眉間に深いしわが刻まれる。花からイオルの気配を感じたからだ。静かに近づくとアスターは横から花瓶を奪い、勢いよく壁に叩きつけた。

「きゃあ」

アスターの突然の訪問と凶行にシルヴィアは驚き、おびえた。震えるシルヴィアに対するアスターの眼は冷ややかだが、彼のとった行動は、その瞳とはまるで正反対だった。

アスターはおもむろに首に下げていた鍵を取り出し、シルヴィアの足を戒めている枷をはずす。

「アスター様？」

突然のアスターの行動にシルヴィアは戸惑う。初めて、はめられた時から今まで外されたことなどなかったからだ。

「きゃっ」

鎖を外したのに動こうとしないシルヴィアに痺れを切らしたのか、アスターはそのまま彼女を立たせると手を引き、扉のほうへと向かった。

「あの、アスター様？」

「黙ってろ」

シルヴィアがアスターに問いかけようとしてもぴしやりと拒絶する。シルヴィアの心臓が緊張で早鐘を打つ。どこに連れて行かれるのだろうか。不安だった。今まで、アスターが動くたびにシルヴィアは何かを奪われてきた。初めは、父を。それと同時に国を。そして純潔を奪われ、自由さえも奪われた。これ以上、何を奪われるのか。その怯えがシルヴィアから言葉を奪っていく。

彼は扉を開け、部屋を出ると、そのまま通路を進み、奥の階段を降り、そして裏口から王宮の外へと出た。外へ出たところでアスターはシルヴィアの手を放す。

それから顎をしゃくりついて来るよう、シルヴィアを促すと、シルヴィアのことはお構いなしにどんどん奥へと進んでいく。颯爽と歩くアスターに遅れまいと必死についていくシルヴィア。

だが小柄なシルヴィアはアスターとの歩幅にかなりの差があり、それを埋めようと、少し小走りになりながらついていった。

「待ってください」

ハアハア言いながらも必死に足を動かすシルヴィアの小さな声にも立ち止まらず、アスターは一人先に行く。結果、アスターが立ち止まった所にたどり着いた頃には、シルヴィアは汗だくになっていた。

「アスター様？」

息を整え、アスターを呼ぶ。彼はシルヴィアの方をようやく振り返った。

「あの……。ここは？」

シルヴィアの問いにアスターは無言である方向を指差した。そこにあったのは、小さな池。そしてその池の中心に向かって道が伸びていて、その道の果てには質素な四角い石碑が置かれていた。シルヴィアは驚きに目を見張ると、その石碑に向かって走り出した。

『まさかっ！』

そこにたどり着くとシルヴィアは跪き、石碑に刻まれた文字を読む。

―シェファーズ最後の王。ここに眠る―

そう書かれていた。

『お父様……』

鬼神アスターのことだから父の亡骸など、どこかに打ち捨てられていると思っていた。だから、父を丁重に葬ってくれたことに対しては、素直に感謝の念がこみ上げてくる。

「ありがとうございます」

シルヴィアの涙にぬれた微笑にアスターは息をのむ。

「一応、一国の王だった人間だからな。それに、俺が指示したわけではない。家臣たちが勝手にやっただけだ。礼ならやつらに言うがいい」

ばつが悪そうにアスターは顔を背けた。彼の気まずそうな表情にシ

ルヴィアから自然と笑みがこぼれる。アスターのこんな人間くさい表情を見るのは初めてだった。先ほどまであった緊張感がとけ、シルヴィアはアスターに許しを求めた。なぜだか今のアスターなら、自分の願いを聞いてくれると思ったのだ。

「アスター様。一つお願いがあるのですが……」

アスターは顔をあげ、シルヴィアを見つめる。

「なんだ？」

シルヴィアは両手を組み跪いたまま、アスターに懇願した。

「ここで歌を歌わせていただけませんか」

「歌？」

「はい。お父様が安らかにお眠りになられるように。鎮魂歌を歌わせてはいただけないでしょうか」

アスターは二拍ほど間をあげた後、そっけなくシルヴィアに答えた。

「好きにすればいい」

「ありがとうございます」

穏やかな微笑みをアスターに向けたあと、シルヴィアは立ち上がり石碑に向き直った。

「お父様。どうか安らかにお眠りください」

石碑を愛おしそうになで、そこに漂う清風を胸いっぱい吸い込んだ。シルヴィアから癒しの歌が聞こえてくる。心が洗われるような美しい響きにアスターはいつのまにか聞き惚れていた。すると、その歌声に誘われるように空から小鳥たちが、森からはリスなどの小動物たちが顔を出し、シルヴィアとアスターを囲んでいる池の周りに集まってきた。

「天の花園」

アスターの口からシェファーズの異名が零れ落ちる。温暖な気候に支えられた美しい景色と豊かな大地の恵み故にシェファーズは【天の花園】と呼ばれてきたと思っていた。

しかし、本当はこのような奇跡を目の当たりにできるからなのではないかとアスターは思った。この世のものとは思えない光景。シルヴィアからは神々しい光が放たれていて、その姿はまるで天使のようだった。白い翼を広げ、天に昇っていかうとする天使のように……。

『天に昇る……』

そのときアスターの胸がズキッと激しく痛む。

そして、気がついたら叫んでいた。

「シルヴィアッ！」

その切迫した大声にシルヴィアが驚くと、集まっていた小動物もそれが伝達したかのようにビクッと身体を震わせ、一目散に逃げた。

その後、辺りを静寂が包み込む。

アスターの異変に気がつき、シルヴィアが何か言いたそうに唇を開きかけたが、その前にアスターはくるりと背を向け、来た道に戻っていった。

「もういいだろう。そろそろ戻るぞ」

その言葉だけを残して。

「えっ？ あっあの、待ってください」

シルヴィアの身体は慌ててその背を追いかけて、動くが、彼女の頭の中もアスターのことではいっぱいになっていた。

そっけない態度で思いやりもない。だが、この日、シルヴィアのアスターに対する印象は少し変わった。アスターはその名に相応しく人間の心など持たない鬼のような人だと思っていた。だが、父王の墓を作り、そこへ自分を連れてきてくれたのは私への気遣いであり、アスターの優しさではないかと。

『父を殺し、国を滅ぼした張本人。憎むべき仇。気を許してはいけない。純潔を奪い、自由を奪い、私を日々苛む人。だけど…』

『シルヴィアッ！』

彼の熱い声。

そして自分を捕らえて放さぬ力強い両腕。この日、本人も気づかないくらい小さな、小さなともし火がシルヴィアの心にもったのだった。

目覚めの朝5

アスターが執務室に戻ると、そこには副司令官のアービスの姿があった。入ってきたアスターの常ならぬ雰囲気心配そうに尋ねた。

「アスター様。何かあったのですか？」

アービスの言葉にハツとするが、瞬時に動揺を消し、冷静に対処する。

「いや。なんでもない。ところで、シェファーズ国民の様子はどうか？」

「特に問題は起きてはいないようです。大半の民が素直に我々に従っておりますが……」

アービスが言いよどむ。

「なんだ？ はっきり言え」

「特に気にすることはないと思うのですが、シェファーズ近衛軍の将校数名が姿をくらまし、行方がわかりません」

「そいつらの扇動で反乱が起こる可能性がある？」

「ないとは言い切れません」

アスターは、少し思案すると、アービスに指示を出す。

「確かにな。一応、警戒しておけ」

「分かりました。引き続き、行方を追います」

「それから、あれを実行する。今すぐふれを出せ。明日、王都に住む民は王宮前に集合しろと」

「はい。ただシルヴィア様が承諾なされるかどうか……」

「問題ない。それに関しては手を打っておく。ところで、ローザリオンはどうだ？」

アービスは困ったように眉を下げる。

「それが、これといった情報があがってこないんです」

その言葉にアスターは眉をひそめる。

「何もないければ、それにこしたことはないが……。不気味だな」

「ええ。アルグリア王妃とディアナ王女を擁するローザリオンがこのまま引き下がるとは思えません。必ず占領して間もない今を狙うはずなのですが……」

アスターも同感だった。ローザリオンが動かないはずがない。

「あいつに連絡はとれたか？」

「はい。マルリオーザ侯爵家を探るそうです」

「そうか。なら、あいつの報告を待つしかないな」

「そのようですね」

「明日の準備は任せたぞ」

「はい。わかりました」

アービスは敬礼すると、退室していった。アスターは、はあと一息つくと拳を振り上げ、ドンツと机を殴りつける。

脳裏には先ほど別れたシルヴィアの顔が浮かぶ。シルヴィアの名を大声で叫んだとき、アスターは自分自身に驚愕した。あのときの胸の痛みは、恐れから来る痛みだった。シルヴィアがどこかへ行ってしまう。そう思ったら、とっさに名を呼んでいたのだ。

イオルが贈ったなずなの花束を見た瞬間から、わけのわからない感情がアスターを振り回していた。許せなかった。なずなの花を贈ったイオルではなく、その花を見つめ続けるシルヴィアが……。

シルヴィアの心に自分以外の者が入り込むなど、到底許せるものではない。そう思った。

シルヴィアの心からイオルを消す。そのためにシルヴィアを抱き、シェファーズ国王の墓に連れて行ったのだ。こんなことは初めてだ。女のために何かするなど。鬼神ともあろうものが女の顔色をうかがうようなことをするなど。

そして、鬼神が何かに恐れを感じるなど。

このときアスターは必死に自分を取り戻そうとしていた。

「俺は鬼神だ。人じゃない。鬼なんだ。愛だの、恋だのという感情はない。恐れなどもない。それにあの女は俺のもの。あいつの顔色をうかがう必要などない。利用できる者はとことん利用する。利用

価値があるからそばに置く。ただそれだけだ」

そう自分に言い聞かせ、ある計画を実行することに決めた。

『たとえ泣き叫んでも、抗おうとも、どんな手を使ってでも従わせる』

その決意を胸にアスターは動き出すのであった。

波乱の幕開け

第三章 波乱の幕開け

昨夜、アスターはとうとうシルヴィアの元を訪れることはなかった。外された鎖はそのまま。うれしいはずなのに現実は少し違った。

『寂しい』

ふとそう感じた。

『やだ。何を考えているの。わたしったら!』

シルヴィアは、心に浮かんだ気持ちを否定するかのように首を横に何度も振る。

『あの人は、敵。仇よ。私を脅迫し、嫌なことでも無理強いをするような人。冷酷な人よ。あの人に優しさなんて……』

昨日のアスターの様子がシルヴィアの脳裏をよぎる。複雑な心境だった。父を殺した人間が父の墓を作る、その仇に導かれ、実の娘がそこを訪れる。

はあくっとシルヴィアの口からため息が出る。物思いにふけっていると、唐突に扉が開いた。そこにいたのは、アスターだった。

「アスター様？」

だが、アスターはちらりとシルヴィアの顔を一瞥しただけですぐ視

線をそらす。

「アスター様？」

アスターの態度がおかしい。シルヴィアは心配そうに再度呼びかけた。

「あの、アスター様。どうかなさったのですか？」

「お前にやるべき仕事があった」

そういってアスターはテーブルの上に置いてあった呼び鈴を鳴らす。

チリリン

すると、何人かの年配の女性たちが入室してきた。手にはそれぞれドレスや化粧道具などを持って。

「仕度ができたら王城の大バルコニーに來い」

「え？」

それだけいってアスターは早々に部屋を出て行った。その素っ気無い態度にシルヴィアの胸がズキッと痛む。

「シルヴィア様。お着替えのお手伝いをさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「あっ。はい」

シルヴィアはわけがわからなかったが侍女たちに促されるまま仕度をし始めた。用意されたのは白いドレス。これもアスターが用意したのだろう。なぜならアスターは、シルヴィアに白い服以外着せることはなかったからだ。

姿見の前で着飾った自分を見る。

「お似合いですよ」

仕度を手伝ってくれた侍女たちが自分の褒めてくれた。裾や袖に金糸の刺繍があるだけで余計な装飾が一切ないシンプルなドレスは清楚なシルヴィアの魅力を最大限に引き出している。そして、髪には金色の髪飾り。どれもこれもシルヴィアのためにあつらえられたもののようにぴったりだった。シルヴィアは、頬を染める。アスターが自分のことを考えて用意してくれた。そう考えるだけでなぜか、胸が温かくなった。以前は、それさえも自分を閉じ込める檻のように感じていたのに。しばらくするとコンコンコンとノックがする。

「シルヴィア様。お迎えに上がりました」

扉の外から声がした。

「すぐに、参ります」

扉の方へ歩いていくとすかさず侍女が扉を開けた。外にいたのはアービスだった。シルヴィアの顔が少し曇る。彼もまた、父王の最後に立ち会っていた。アービスもそんなシルヴィアの心情を察していた。

「申し訳ございません。ご不快でしょうが。ご一緒してもよろしいでしょうか」

アービスに罪はない。彼は国の命令に従っただけ。複雑な心情を心の奥底に沈め、シルヴィアは彼に微笑んだ。

「案内……していただけますか？」

涙を流しているわけではない。微笑を浮かべているのだが、アービスには泣いているようにしか見えなかった。

アービスはこのとき初めて罪悪感を覚えた。今まで、シェファーズ征服に関して、アスターや皇帝陛下の判断は正しいと思っていた。国のため、民のため、戦ってきたが、シェファーズの民のことなど考えたこともなかった。平和的解決はなかったのだろうか。今更ながらに思う。

「あの……」

シルヴィアの戸惑った声にアービスは我に返った。

「失礼しました。では、こちらへ」

シルヴィアはアービスの先導でバルコニーに向かった。向かう間、シルヴィアの心臓はドキドキしていた。彼の真意がわからなかった。

『やるべき仕事ができたと書いていたけど、一体……』

不安もある。だけど、少しの期待もあった。

とてもひどい人。残酷で冷たい。でも、どこか寂しそうで……。

『シルヴィア！』

彼が自分と呼んだときに漂った寂しそうな空気がシルヴィアの心を締め付ける。そして自分が彼に必要とされている存在なのではと感じていた。

シルヴィアは母が死んでから、だれから必要とされなかった。父は自分を案じてくれていたが、自分の存在が父にとってとても重いものだと考えられなかった。憎むべき相手なのだと思いながら、その反面どんな感情にしろ、自分に執着してくれることに喜びを感じている自分がいる。

心を許してはいけない。父王の最後を思い出せ。自分にした仕打ちを思い出せ。そう自分に言い聞かせている毎日。

『憎み、憎まれる関係。それが私たち』

過去は消せない。だが、心のどこかで今日から何かが変わるのではないかという期待が存在しているのも事実だった。

波乱の幕開け2

「シルヴィア様。ここからはお一人でお願いいたします」

アービスが道を譲り、礼を取る。シルヴィアは軽く会釈すると、前に進んだ。バルコニーに出たシルヴィア。太陽の光がさんと照りつけている。眩しさに目を細める。

ワアアアアアーーーーー

バルコニーから見下ろす光景にシルヴィアは眼を見開いた。そこには人々。多くの人たちが集まっていた。それは、シェファーズの民だった。彼らは口々に姫様と叫ぶ。彼らを見たとき、シルヴィアの心は申し訳なさでいっぱいになった。

『王族は民のためにある』

アルグリアにそう言ったのに、今の今まで真の意味で彼らを労わり、彼らのために何をすべきなのか考えたこともなかった。シルヴィアはバルコニーの手すりぎりぎりまで歩むと民に向かい頭を下げた。その様子にシェファーズの国民たちは皆、口をつぐむ。頭を下げ続けるシルヴィアの肩に手が置かれる。誰の手かシルヴィアにはもう分かってしまう。シルヴィアはその手に促されるかのように上体を起こす。しかし、その顔はまだうつむいたままだ。そのシルヴィアにアスターが話しかける。

「仕事だ。シルヴィア。シェファーズ最後の王女としての責務を果たせ」

「責務……」

「そうだ。今から彼らに宣言しろ。シェファーズの統治権を正式にリイアードに譲渡することを。そして、やつらにそのことを納得させろ」

「それは……」

突然のことにシルヴィアは驚いた。

「分かってるな。うまくやれ。民の命が惜しかったらな」

シルヴィアは勢いよくアスターの顔を見上げた。

「広場の周りをよく見てみる」

アスターに促されるままシルヴィアはバルコニーから周りを見渡した。視界に飛び込んできたのは王城の各部屋から銃を構えて、民を狙っている狙撃手たちと広場にいる民を取り囲む兵士たち。彼らの命はアスターの手の内だった。シルヴィアの顔から汗が滴り落ち、唇が小刻みに震える。対照的にアスターは貴公子のように微笑んでいた。そんな笑みは初めて見た。だが、その笑みは嘘で塗り固められた偽りの姿だとシルヴィアには分かっていた。

彼はやると言ったらやる。シルヴィアは意を決し、民に話しかけた。

「皆さん。わたくしは、シェファーズ第二王女 シルヴィア・ソナ・シェルフアーです。今日は皆さんに重大なお知らせがございます。先の戦でシェファーズ国王が死去いたしました」

その言葉に、歓喜に沸いていた民たちはすすり泣き始めた。

「わが国シェファーズはこれよりリリィアードの統治の下、生きていかねばなりません。しかし、安心してください。慈悲深いこちらの神聖リリィアード帝国第一皇子アスタリオス・ラ・ジェラルド様がある約束をしてくださいました。シェファーズの民をリリィアード本国の民と同等に遇すると。これから、国の法律、通貨などあらゆる面で変化するでしょう。ですが、その生活は皆にとって幸多いことでしょう。ですから、武器を捨て、彼らに対する憎しみを捨て、彼らと共に生きる道を選んでください」

シルヴィアの言葉に一人の男性が問いかけた。

「姫様はこれからどうなさるのですか？」

シルヴィアの答えに民たちは固唾をのんで見守る。だが、その問いにシルヴィアが答えることはなかった。なぜなら、彼女が口を開く前にアスターが肩を抱き寄せ民に向かって言い放ったからだ。

「シルヴィア王女はシェファーズ最後の王女として私の妻になる」

シルヴィアは再び驚く。そんな話は今まで一度も聞いていない。他のリリィアード人たちも同様だった。

「神聖リリィアード帝国第一皇子アスタリオス・ラ・ジェラルドはここにシルヴィア・ソナ・シエルファアとの婚約を発表する」

次の瞬間、広場に集まった民たちは歓喜に震えた。王女が皇子に嫁げば、民たちの生活は保障される。もう怯えなくてもいい。それが、喜びとなって現れたのだ。

アスターは一瞬にしてシェファーズの民の心を掴んでしまった。そのことにシルヴィアだけが恐れていた。

そして、シルヴィアの淡い期待は裏切られる。必要とされているのは間違いなかった。だが、それはシェファーズ王女としての自分。シルヴィアという一人の人間ではないのだ。

胸が痛い。とても痛い。どうしてなのか分からない。でも、とても痛かった。

『やはり私は、あの人にとって利用価値のあるただの道具なのね』

シルヴィアの心はズタズタに切り裂かれていた。どうして、アスターを憎みきれないのか。

どうして、彼に一人の人間として必要とされたいのか。どうして、期待を持ってしまったのか。その理由に気づきもせず。ただ傷ついた心だけを抱えていた。

波乱の幕開け3

王宮では第一皇子が突然放り投げた爆弾発言をめぐり、すぐに緊急会議が行われた。

「どういことですか。アスター様！ シルヴィア王女との結婚など、わしは今日初めて聞きましたぞ！」

今回の戦に付き従った老将軍が椅子を蹴倒さんばかりに立ち上がり、アスターに意見した。

そんな老将軍の様子とは正反対のアスターは足を組み、腕を組み、怪しい笑みを浮かべている。そんな不遜な態度に老将軍の額に青筋が立つ。

「聞いておられるのですか！ アスター様！」

ドカッ

老将軍がその年に似合わぬ鋼鉄の如き拳を円卓に叩きつける。すると、拳型に卓の表面がへこんだ。拳がめり込んだ様を見た周りの臣下たちの顔は一斉に青くなったが、アスターは恐れることなく、冷静に口を開く。

「俺がシェファーズ王女を娶るのがそんなに気に入らないのか？ それとも、シェファーズ王女は神聖リリアード帝国第一皇子の妻には相応しくないと考えているのか？」

その言葉に老将軍の怒りのボルテージも少し下がる。

「いえ。そういうわけではございません。しかし、アスター様は第一皇子。あなた様の婚姻は国の未来を左右するほどの重大なもの。勝手に決められては困ります！」

將軍の言を聞いた臣下も皆うなずく。

「將軍のおっしゃることももつともです。しかも、シェファーズの民は基本的に大人しく、争いを忌避する傾向にあります。反乱や抵抗などの心配もほとんどないでしょう。そんな亡国の姫を娶っても得る利益はさほどありません。愛妾になさるなら、反対しませんが、正式な妻、正妃になさるのはどうかと……」

皆一様に賛同する。だが、アスターの反応は変わらない。フツと笑うと静かにつぶやく。

「甘い」

「はっ？」

側近くにいるアービスが聞き返す。すると、ゆっくり立ち上がり皆を見下ろした。

「甘いと言ったのだ」

その瞳は視線は氷のようだった。

「確かに、シェファーズは我らリリアードの手に落ちた。それに、シェファーズの民は従順だ。リリアードとの併合は問題ないだろう。だが、問題がないわけではない」

「問題」

「ローザリオンだ」

その場にいた者全員がアスターの言葉にハツとした。

「ローザリオンにはシェファーズ王妃アルグリアと第一王女ディアナがいる。おそらくこれから、ローザリオンが彼女たちを擁し、正統性を主張してくるだろう。ローザリオンにシェファーズの正統な王位継承者がいる以上、我々もそれに対抗しなければならない」

「その対抗手段がシルヴィア王女だと？」

老将軍が聞く。アスターは無言で肯定する。

老将軍が再度口を開こうとしたところへ別の声が割って入った。

「しかし、シルヴィア王女は第二王女。継承権は第二位。正統性では向こうが上では？」

アスターの双子の弟イオルだ。

イオルは挑むような強い瞳でアスターを見つめる。

「ははははは」

アスターは笑う。その場に似合わぬ反応に皆注目する。

「それが、そうでもないんだよな」

勝ち誇ったかのようにアスターはイオルを見る。

「どういふことですか？」

もったいぶったようにアスターは口を開く。

「俺は、ここ数日、シェファーズの法典から王位継承に関する記述をさらっていた。そこに興味深い記述があった」

すると、アスターは背後に控えている侍従に合図する。侍従はあらかじめ持ち込んでいた分厚く巨大な書物をアスターの前に置く。アスターはその本を手で支え、ある部分を指で指し示した。小さい字なので遠くの臣下には見えない。そこで、アービスがその記述を読み上げる。

「王位は、第一に血筋を重んじる……」

周りとはとても、静かだった。アービスが読み上げた内容はこうだ。

――王位は第一に血筋を重んじる。正妃に男子なくば女兒が王位を継ぐべし。正妃に子がなくば第二妃の男子が継ぐべし。第二妃に男子なくば女兒が継ぐべし。――

アービスの言葉を聞いていた者すべてが絶句する。アスターがにやりと笑う。

「どこにも書いていないだろう？ 長幼の順については」

イオルがアスターの言葉の真意を説明する。

「つまり、先の正妃の姫君であるシルヴィア様にもディアナ姫と同

等の権利を有しているということですか？」

アスターは笑みを深くする。その意地の悪い笑みにイオルは驚く。

「他にも、何かあるのですか？」

こういう反応をしているとき、アスターは必ず何かを隠し持っているのだ。ゴクツと誰かが唾を飲み込む音が聞こえる。

「法典に書かれていたようにシェファーズでは血筋が重んじられる。長幼の順と後ろ盾、宮廷内の権力という点ではシルヴィア王女はデИАナ姫には勝てない。だがシルヴィア王女はある一点だけ、デИАナ王女に勝っている点がある」

ここまでお膳立てされてアスターが何を言いたいのかわからない人間はいなかった。

「シルヴィア王女はデИАナ王女より正統な血筋なのだ。実は、シルヴィア王女の母上の生い立ちを調べたんだ。皆もおかしいと思わなかったか？ リリィアードの王室とも縁遠い、片田舎の貧乏貴族の姫をなぜ正妃に選んだのか。誰が見ても、ローザリオンきっての名家の出であるアルグリアの方が正妃にふさわしい。なのにだ。しかし、何よりも血筋を重んじるシェファーズならその理由はわかる。シルヴィアの母上は先の国王の姪だからだ」

誰も二の句がつけなかった。そんな話は聞いたことがない。初耳だった。イオルも例外ではなかった。

『そんなばかな。シェファーズについて私も調べたがそんな情報は一切上がってこなかった』

みんなの驚愕に満ちた反応を満足そうにアスターは眺める。

「知らなくて当然。このことを知っているのは、ソレンド男爵と夫
人と皇帝陛下のみ。この情報は今日皇帝陛下からもたらされた」

その事実一同絶句した。

「つまりシルヴィア王女が真の王位継承者だ」

アスターは会議に出ていたものすべてに宣言した。

「とりあえず明日、姫と結婚式を挙げる。理由は、言わなくても分
かるな」

ローザリオンがいつ動くか分からない以上、先手を打っておくとい
うことだ。

「異存は？」

アスターの言葉を合図に、臣下は膝をつき、アスターに最上級の礼
を示した。

そうイオル以外は……。

波乱の幕開け 4

次の日、シルヴィアは、アスターが騎乗する漆黒の馬に乗せられ、王都郊外の丘へと連れて来られていた。

「見ろ、シルヴィア。これが今のシェファーズだ」

眼下には復興中のシェファーズの街と王城が見えた。戦後初めて見るシェファーズの痛々しい姿に悲しくなる。黄金の大地と呼ばれた麦畑は所々焼け焦げ、澄んだ色をしていた湖も輝きを失っていた。アスターはシルヴィアの腰を抱き寄せると耳元で囁いた。

「その眼に焼き付けておけ。お前が俺を裏切れば、この辺り一帯に今以上の災厄が降りかかるだろう」

シルヴィアはギュッと眼を瞑る。事あるごとにアスターはシルヴィアを脅す。『逃げるな。拒むな。逆らうな。』と。悲しかった。直接的ではないにしろ暗にアスターにそう言われるたび、心に杭が打ち込まれるような痛みを感じる。そして左の足首には鎖の代わりにはめられた銀のアンクレットがシャランと鳴る。まるで奴隷の証のように。

「シルヴィア。眼を開けろ」

アスターの命令に従い、シルヴィアは眼を開ける。アスターは丘の反対側に馬首を返した。その丘の麓には一つの教会が立っていた。

『エル・ファミール教会』

シェファーズ最古の教会にして、代々シェファーズ王室の婚礼の式を執り行ってきた場所。

「今日、俺たちはあそこで婚礼の式を挙げる」

アスターの言葉にシルヴィアは無言で頷く。

『そう。私は、今日ここでこの方の妻になる。操り人形という名の妻に』

そして、数人の供の者たちと一緒に、丘を下り、教会へと入った。それをシルヴィアは他人事のように眺めているだけだった。

「ようこそ、いらっしゃいました。シルヴィア様。アスタリオス様。お待ちしておりました」

中に入ると教会の司祭が出迎えてくれた。

「世話になる。司祭殿」

アスターがそっけなく答える。一方シルヴィアはというと……。

「お初にお目にかかります。司祭様」

丁寧にお辞儀をしていた。

「初めてだと？」

アスターがシルヴィアに聞き返す。

「はい」

シルヴィアは恥ずかしそうにうつむく。

「エル・ファミローは、今まで多くの式典や儀式などで使われシェファーズ王室とは密接に関わってきたと聞く。なのに、お前は、ここに来るのは初めてなのか？」

突き刺さるようなアスターの視線から逃れるかのごとく、シルヴィアの背はますます縮こまっていた。

「…はい」

かすかに聞こえるほどの声でシルヴィアは答えた。

「私は、生まれてから王城の城壁を越えたことがないのです」

アスターは驚きに眼を見張る。

二人の間になんともいえない空気が流れる。

そこにこやかな笑みを浮かべた司祭が割って入った。

「シルヴィア様の初めての訪れが、この教会だとは光栄の至り。しかも、ご結婚の地として選んでいただき喜ばしい限りでございます。ご婚儀の準備が出来次第、お呼びいたしますので、今しばらくお待ちいただけますか？」

「わかった。急に婚礼の儀を行えと無理を言ったのはこちらだ」

「そう言っていたけると助かります。では、ご用意ができるまで、ご自由にお過ごしください。そうそう、教会の裏にある庭園は我々が、精魂こめて毎日手入れをしている自慢の庭でございます。ぜひ、見てやってください」

「では、そうさせてもらおう。失礼する」

そういうと、アスターはシルヴィアの手を取り裏庭の方へと歩き始めた。お付きの者たちも二人に同行しようと付いてくる。アスターはチツと舌打ちをすると振り返り、彼らに命じた。

「付いてくるな」

無愛想に一言。従者たちもアスターのこの物言いには慣れているので、何も言わず一礼。

その場にとどまりアスターとシルヴィアを見送った。

波乱の幕開け5

そのままアスターはシルヴィアの手を握り裏庭へと向かった。アスターは相変わらずシルヴィアのことなどお構いなしに歩いていく。背の高いアスターの歩みに小柄なシルヴィアは歩幅が合わず小走りなる。

「ハアハアハア、あの…。きゃっ！」

足が絡まり、シルヴィアはとっさにアスターの腕にすがった。そこで、ようやくアスターの歩みが止まった。

「すっ、すみません」

荒い息を吐きながら、シルヴィアは謝る。すると、頭上からチツと舌打ちが聞こえた。ズキッと胸が痛んだ。アスターにとって、自分の相手をするのは面倒なことなのだと感じた。瞳が潤む。

『泣いてはダメ』

シルヴィアは自分自身に言い聞かせる。アスターに関わることで泣いてしまえば認めてしまうことになる。アスターに優しくしてほしいと思っているということ。

『ダメ。もう決めたのに。何も期待してはいけない。この人は、お父様を殺した憎むべき仇。それ以上でも、それ以下でもない』

そうシルヴィアは自分に言い聞かせていた。

その時、アスターの腕がシルヴィアの背と膝の裏に回り、シルヴィアを抱き上げた。

「きゃ」

突然のアスターの行動に驚き、理解できず、シルヴィアはアスターの顔を見上げた。

「遅い……」

アスターはボソツと言発しただけでシルヴィアの顔を見ることもなく無言で歩いていく。

『もしかして、私のことを気遣ってくれたの』

そう思ったが、シルヴィアはすぐに心中で否定した。

『違うわ。ただ、単にドジな私に苛立っただけ。ただそれだけ……』

時たまアスターの腕が優しくシルヴィアに触れるときがある。その刹那の優しさがシルヴィアを苦しめる。彼が、そんな風に触るたびに、憎しみが減っていく気がするのだ。

『お願い。もうこれ以上かき乱さないで。私の心を』

シルヴィアは辛そうに唇をかみ締め、両手をきつく握り締めていた。すると、風に乗ってどこからか、花の香りが漂ってきた。

「シルヴィア、見ろ。着いたぞ」

言われるがまま、顔を上げると、そこには一面の花畑が広がっていた。花の種類、植え方などすべてが計算されつくされた王城の庭園とは違い、無造作に植えられていたが雑草は丁寧に除去され毎日欠かさず手入れされているのが分かる。自然の美というものがそこにはあった。

「きれい」

感嘆の声がシルヴィアの口から漏れる。

アスターは静かにシルヴィアをその場に下ろした。すると、シルヴィアは一步一步色とりどりの花々に近づいていく。花に顔を近づけその香りを堪能する。強張っていたシルヴィアの表情は自然とほころぶ。

そんなシルヴィアにアスターは眼を奪われていた。太陽の下、光り輝く髪。白い肌。そして見る者の心を癒すその微笑。アスターは吸い寄せられるかのようにシルヴィアへと近づいた。そして、シルヴィアが今まさに、その芳しい香りを堪能していた白百合を彼女の目の前で手折ったのだ。

「えっ」

シルヴィアの戸惑いの声が聞こえる。屈んでいた身を起こし、アスターを見る。アスターは手折った白百合に口付けていた。そして、視線だけシルヴィアに送って寄越した。その壮絶な流し目に、シルヴィアの心臓がドクツと脈打つ。お互いの視線が絡み合う。シルヴィアは自分の頬が赤く染まり火照っているのを感じた。

すると、アスターは視線を絡めたまま、白百合から唇を離した。そして、シルヴィアの髪に白百合をさした。アスターが微笑む。それは、シルヴィアが見る初めてのアスターの優しい微笑だった。

しかし、次の瞬間アスターの表情が一変する。一瞬驚いたような顔をしたかと思うと眉をひそめ、険しい表情になり、アスターはシルヴィアの髪にさした白百合に手を伸ばした。

それから、そのまま花を掴むとシルヴィアの目の前でグシャッと握り潰したのだった。シルヴィアは、呆然と彼を見つめることしかできなかった。アスターの指の隙間からはらりと白百合の花びらが一枚地面に落ちる。そして、手の中でばらばらになった白百合をシルヴィアに向かって投げつけた。

アスターの手から放たれた白百合の花びらが頭上から降ってくる。それと同時にシルヴィアの瞳から涙がこぼれ落ちた。ぽろぽろと涙の粒が頬をぬらしていく。アスターはシルヴィアに背を向けると、いつものように冷たく言い放った。

「飽きた。俺は先に戻っている。お前は、気が済むまでここにいればいい」

言うだけ言うとシルヴィアの返事も待たずアスターは建物の中に入ってしまった。

混乱しているシルヴィアを置き去りにして。そうシルヴィアは混乱していた。一瞬だけ垣間見えた彼の優しさ。そして、一瞬にして奈落の底に自分を突き落とした彼の非情さに。

考えても考えても出ない答えに、シルヴィアの心は張り裂けそうになり、アスターが消えた建物の出入り口を見つめたまま、そこに立ち尽くすことしかできなかった。

だから、読み取ることができなかった。シルヴィアの背後から近づく、怪しい気配を。

波乱の幕開け6

ツカツカツカとアスターは足早に回廊を進んでいた。その表情は悪鬼のごとく歪み、触れれば切れるといった感じだ。

『俺は一体何をしているんだ！』

アスターもまた混乱していた。あるとき、シルヴィアの瞳に映っていた自分の顔に愕然とした。幸せそうに微笑んでいたのだ。あれでは、まるで恋に落ちた馬鹿な男の顔だ。

『違う！ そんなはずはない。恋だと！ 俺に愛だの、恋だのという感情などない！』

アスターは立ち止まると大きな声で叫んだ。

「俺は鬼神アスターだ！ 俺は人ではない。俺には人を慈しむ心などない！ ましてや恋などっ！」

そしてドカツと近くにある扉を叩いた。すると、その扉がキィツと開いた。

「どうされましたか？」

そこには一人の修道女が立っていた。

アスターは片手で顔を覆いながら軽く息を吐くと一言。

「いや。なんでもない」

「ご気分が優れない様子ですが…」

なおも聞く修道女にアスターは片手で顔を覆いながらギツとにらみつけた。

「何でもないと言っているだろう。下がれ。目障りだ」

しかし、修道女はアスターの視線もなんのその。アスターの顔に手を伸ばすと、顔を覆っていた手を外させた。よく見ると、その修道女はかなりの高齢だった。しわにまみれた顔とその手で彼女はアスターの手を握り優しくなでた。

「やめろっ！」

アスターは、その手を振り払う。

「やめろ」

うつむくアスターに彼女は優しく語りかけた。

「何をそんなに怯えているのです」

「俺が怯えているだと」

絶対零度の視線で老修道女をにらみつける。

だが、老女は変わらぬ微笑でアスターに接する。

「怯えているのでなければ、恐れているのですね」

「何？」

老女はアスターに背を向ける。

「ええ。今のあなたはまるで深い森の中をさ迷っている子犬のよう」

「この俺が子犬のようだ」と

アスターの額に青筋が立つ。老女は無言で先ほどアスターが叩いた扉の中へと入っていった。無視されたアスターは老女に続き、部屋に入る。

「貴様！ この俺がどこの誰だか分かっているのか！」

その言葉に反応してなのか、ピタッと立ち止まった老女。彼女の背後には小さな祭壇がある。ここはどうやら小さな礼拝堂のようだ。

「ええ。存じ上げております。アスター様」

今にも噛み付きそうなアスターをあやすように振り返った老女が微笑む。

「アスター様。わたくしは俗世を捨てた身。あなたが、シェファーズを滅ぼした鬼神アスターその人であっても、わたくしには関係ありません。わたくしの目の前にいるのは一人の悩める子羊でしかありません」

「なんだと！」

誰もが恐れるアスターを子犬・子羊呼ばわりする人間など今までな

かった。アスターの手が自然と腰に下がっている剣の柄にのびる。

「恐ろしいのですか？ 他人に心を許すことが」

老女の言葉に反応し、アスターの手が漆黒の剣の柄を握り締める。

「恐ろしいのですか？ 人を愛することが」

「黙れ」

「怯えているのですか？ 人を愛し、自らの心を譲り渡したとき、ご自分がどう変わってしまうのか」

「黙れ！」

疾風のごとく剣を抜く。切っ先を突きつけられても老女は動じなかった。それどころか、老女は一步前に踏み出した。アスターの目が見開かれる。

波乱の幕開け7

「ここは、礼拝堂。心を落ち着かせ、お祈りしてはいかがですか？
あなたの悩みを解決することはできないかもしれませんが、気分転換になるかもしれませんよ」

とても温かい笑顔だった。そしてその微笑の奥にある有無を言わさぬ迫力にアスターはのまれた。剣を静かに下ろすと改めて礼拝堂を眺めた。白い花が飾られた質素な祭壇。そこに祭られているのは、若い女性の像。その儚げで悲しげな少女の姿が彼の人と重なる。

「似ていらっしやるでしょう？」

老女は誰がとは言わなかった。無言のアスターに老女は語りかけた。

「この方は聖女シエルファア様です」

「シエルファア？」

「ええ。シエファアズ王家の家名は聖女様のお名前から来ているそうです。シエルファア様は初代シエファアズ王の王妃であり、シエファアズの民を救った功績により聖女の一人に列せられていらっしやいます」

「民を救った聖女……。ふっ。この女がどうやって」

アスターは蔑むように聖女の像を見上げた。

こんな触れれば壊れそうな女に民が救えるとは思えなかった。

「シエルファー様はただ人ではなかったそうです。聖典には、こう書かれております。『聖女シエルファー。大地の神の娘。数多の人間の血に染められた大地を救うべくこの地に降り立つ』」

老修道女はアスターにシェファーズ建国神話を語った。

「シエルファー様は戦の耐えなかったこの大地に降り立ち、そこで一人の男性と出会いました。それが、シェファーズ始祖カイゼル・フォン・ヴォルフガング王。シエルファー様は彼に出会い、恋に落ちました。そのとき、カイゼル王は絶体絶命の危機に陥っていたそうです。彼が指揮する軍は敵軍に囲まれておりました。その危機を救ったのがシエルファー様。神の声を用い、森に住む者たちの力を借り、敵軍を撤退させたのです」

アスターは馬鹿にするように鼻で笑った。

「神話というのは、作り話でしかない。神の娘だと馬鹿馬鹿しい」

老女はアスターの神をも冒瀆する物言いに怒ることなく静かに問うた。

「あなた様は神を信じておられないのですか？」

手に持った剣を肩に担ぎ、自信満々に答えた。

「神の存在などどうでもいいことだ。俺は鬼神アスター。自分の道は自分で切り開く。俺が信じるのは己の力のみ」

そして、振り返ることなく礼拝堂を出て行った。回廊を進むアスタ

―は冷静さを取り戻していた。確かにあの老女がいうように礼拝堂で一息ついたのは気分転換になったようだ。

「そうだ。俺は俺だ。俺の信じる道を突き進めばいい。俺は鬼神。恐れるものなど何もない」

アスターが従者たちの所に戻り、しばらくすると司祭がやってきた。

「お待たせいたしました。準備ができましたので、こちらへ」

「待ってくれ。司祭殿。シルヴィア姫がまだだ」

「姫はどこに？」

「庭園だ。あの庭は本当にすばらしかった。どうやら姫は大層気に入ったらしい。まだ戻ってこぬ。先ほど従者を迎えにやった」

アスターはこのとき楽観的に考えていた。シェファーズの民が人質にされている以上シルヴィアが自分の下を離れることなどないと高を括っていた。

そんな、アスターのところへ従者が戻ってきた。それも大慌てで。

「アスター様っ！ 大変です。シルヴィア様がどこにもいらっしやいません！」

驚愕の知らせにアスターは声も出なかった。

『まさかっ！ 逃げたのか！』

頭の中に浮かんだ考えをアスターは瞬時に打ち消す。シルヴィアは

シェファーズの民の命などどうでもいいと考える人間ではない。むしろ、自分の身一つで済むのであれば進んでその身を捧げるような馬鹿女だ。

嫌な予感がした。

「教会の人間も総動員して、シルヴィアを探せ！」

アスターが、その場にいた全員に指示を出したそのときビュツと空気を切り裂く音がする。

開いた窓から矢が飛び込み、アスターの足元に突き刺さった。

しかし、その矢はアスターの命を奪うためのものではなかった。それは矢文だった。アスターは突き刺さっていた矢から文を解き、眼を通す。

「くそがっ」

アスターは低く、静かな声でうめいた。怒りで手の中の文がぐしやぐしやになる。

『シルヴィア！』

アスターは矢の通り道となった窓を見上げた。

―売国奴シルヴィアは我らが預かった。返してほしくば、鬼神アスター一人で来い。―

文にはそう書かれていた。

恋の自覚

第四章 恋の自覚

「ううん」

床に横たわっていたシルヴィアが目を覚ました。身を起こし、未だ焦点の合わぬ目で周りを見渡す。家の中には何もなかった。ここは粗末な小屋の中のような。シルヴィアは、そーっと立ち上がる。

「ここは……。どこっ！」

やっと頭が働くようになったシルヴィアは目の前の扉に飛びつき、開けようとした。だが、扉は硬く閉ざされ、外側から鍵をかけられている。

『どうということ?』

シルヴィアは訳が分からなくなっていた。

『先ほどまで教会の庭園にいたはず。あの方に連れられて』

あのときのことをシルヴィアは思い返していた。胸がズキッと痛む。また涙が零れ落ちそうになる。

『だめ。泣いている場合じゃない』

シルヴィアはブンブンと首を振ると、無理やりアスターの顔を脳裏から追い出した。

『確か、一人でボーっと立たずんていたら……後ろから!』

シルヴィアは思い出した。アスターに置き去りにされ呆然としていたら、背後から何者かに口をふさがれ、意識をなくしたのだ。

『かどわかされた!』

恐怖で体が震える。すると、開くはずのない扉がひとりでに開いた。青ざめた顔をそちらへ向けると、数人の男たちが小屋の中へと入ってくる。かすかに笑ってはいるが彼らの瞳は怒りと憎しみの色に染まっていた。

自然と足が後退する。しかし、シルヴィアは震える体を叱咤し、彼らに問いかけた。

「あなた方は、一体?」

リーダー格らしき男が嘲りの笑みを浮かべながら、逆にシルヴィアに問うた。

「分かりませんかね?」

そして、ぽんぽんと拳で鎧を叩く。

シルヴィアは信じられないものを見たかのように驚いた。彼らが身に着けているのはシェファーズ王家の紋章が入った白い鎧。

「ま…さか。あなた方はシェファーズ近衛軍の兵士なのですか?」

「そうです」

「どうして、こんなことを」

「どうして？」

男は汚い者でも見るような眼差しをシルヴィアに向ける。

「それは、こちらが聞きたいことです。目の前で王を殺されたにも関わらず敵の皇子に抱かれ、挙句の果てには憎むべき敵の妻となり、この地を譲るとはどういうことですか？」

彼らの瞳には軽蔑の情と共に怒りが宿っていた。何の抵抗もしないシルヴィアに対する怒りが。

「あなたは知らないでしょう。奴らに攻められ散っていた名もなき兵士たちのことを。国を守るため、鬼神に殺された近衛軍の兵士たちを」

男は静かに語る。それが、余計に彼の怒り・悲しみの強さを際立たせた。

「我々は絶望しました。あなたのあの演説を聞いたとき」

シルヴィアはハツとした。シルヴィアもあのととき、絶望した。しかし、目の前にいる彼らとは種類の違う絶望だった。シルヴィアの肌はますます白くそして青みを帯びていた。生まれて初めてだった。こんなにも自分を恥じたのは。

『わたし、自分のことしか考えてなかった』

なんて無自覚だったのだろう。自分はこの国の姫なのに。あのバルコニーでの演説のとき、多くの民を見て、彼らのために何ができるか考えようと決意した。なのに、『妻にする』とアスターが言った瞬間、自分が傷ついたことしか、頭になかった。だが、アスターの言葉を受け入れたのは民のために『ああするよりほかない』と思っていた。それが、最善だと、信じていた。今も、その判断が間違っていたとは思わない。しかし、もっと自分が強ければ。もっと賢ければ、最善は他にもあったかもしれない。後悔。後悔。後悔。シルヴィアの心はその二文字の言葉で埋め尽くされていた。

「わたくしをどうするのですか？」

痛む胸を押さえ搾り出すような声で問いかける。男は言う。

「あなたには餌になっていただく」

「餌？」

何のことか理解できなかった。

「さあ、あなたという名の餌に鬼が食いつくかどうか見ものですね」

背筋がぞつとした。冷や汗が出る。

「もしかして、あの方をおびき出すのですか？」

男がにやつと不気味な笑みを浮かべる。それは肯定したも同然。シルヴィアは叫んだ。

「無駄です。わたくしは、あの方にとってさほど重要な存在ではあ

りません！逆にあなた方の命が危うくなります」

助けに来るはずなどない。来たとしても、おそらく軍を率いてやってくるだろう。彼らにアスターたちを退けられるほどの兵力があるとは思えない。

「試してみる価値はあると思います。うわさでは、毎晩その腕に抱き、放さないほどのご寵愛ぶりとか。もう文はしたためて届けさせました。我らも鬼との約束の地へと参りましょう」

「文にはなんと？」

「あなたを帰してほしければ一人で来いと」

それを聞いたとたんシルヴィアの顔から笑みがこぼれた。安心したのだ。

「無駄です。あの方は来られません」

「そうでしょうか？」

男がシルヴィアに手を差し出す

「ええ。絶対に」

そして、シルヴィアはその差し出された手に自らの手を重ねる。悲しそうに微笑みながら。

恋の自覚2

彼らが指定した場所は、小屋から見える小高い丘の上だった。隠れる場所もなく、こちらへ向かってくる相手がよく見えるところだ。万が一アスターが軍を率いて来ても一目散に逃げられる。彼らにとっては好都合な場所だった。後ろ手に縄で縛られたシルヴィアは静かにそのときを待っていた。おそらく、アスターは軍を率いてやってくる。そして、それが自分の最後のとき。

『わたしは、今日ここで死ぬ』

不思議と恐れはなかった。あれほど波打っていた心は、落ち着きを取り戻し、穏やかな風に吹かれている。唯一つ後悔があるとすれば、もう何もシェファーズの民にしてやれないことだ。それだけが悔やまれる。

ゴーンゴーンゴーン

遠くでどこかの教会の鐘が鳴る。

「そろそろ約束の時間だ」

鐘が鳴り止むと、黒い馬が一頭こちらにやってくるのが見えた。

「どうして」

シルヴィアがポツリとつぶやく。その声につられ、男たちが一斉に弓を構える。

「…ないで。やめて。こないで」

シルヴィアの視線はまっすぐ黒い馬の背にまたがる漆黒の騎士を捕らえていた。

「おねがい。やめて。こないで。こないで。こないでっ！」

矢が引かれる。

「お願い！ 来ないでー！ー！」

「放てー！ー！」

シルヴィアの叫びと同時に矢が放たれた。

「アスター様ー！ー！」

矢がアスター目掛けて飛んでいく。このとき、誰もが矢に貫かれたアスターを想像した。だが、その予想はすぐに覆された。アスターはすばやく剣を鞘からはずすと目の前を一閃する。たったそれだけで、自分に向かって飛んでくる矢を防いだのだ。

「さすが、鬼神ということか」

男が小声でつぶやくと、アスターは剣を抜いたまま馬を走らせ突っ込んでくる。

男は慌ててシルヴィアを引き寄せ、その首に刃をあてがった。それを見たアスターは観念して馬の手綱をひく。

「馬から下りてもらおうか。鬼神アスター」

アスターは無言でその要求をのんだ。

「その剣も捨てろ」

手にしていた剣もその場に突き立てる。

シルヴィアは目の前で繰り広げられている現実を受け止めることができなかった。

夢でもみているのかと思った。アスターは絶対に来ないと思っていた。来たとしても、自分を見捨てるだろうと……。なのに、想像と現実の差に驚き、今現在シルヴィアの思考は目の前で行われている出来事に全く付いていくことができないでいた。

そんなシルヴィアをよそにして、男が一步また一步とアスターへと近づく。

首に剣を当てられているシルヴィアも自然とアスターに歩み寄る形になり、二人の視線が交差する。

「膝をつけ」

男の要求にまたしても素直に従うアスター。

シルヴィアの首筋から剣をはずすと彼女をおしのけ、男はアスターの前に歩み出た。

「こうもあっさり鬼神が我が手に落ちるとはな」

男が笑うと周りを取り囲む十数名の男共も一斉に笑う。

「これで俺の名は英雄として歴史に刻まれるのだ！」

そういうと、男は勢いよく剣を振り下ろした。

ガキン

「なっ」

「馬鹿が。剣の近くに俺を置いておけばこうなることは分かりきっているだろうが」

アスターの手には先ほど地面に突き立てていた漆黒の剣が握られていた。傍にあったとはいえ男が振り下ろす剣をよく受け止められたものだ。ありえない神業に、男たちは呆然とした。そして、その隙を逃すようなアスターでもなかった。男の剣をはじき飛ばし、胴をなぐ。血しぶきが舞い、一言も発することなく男は絶命した。一瞬のことで周りにいた者も誰一人、動けなかった。

「来い。シルヴィア！」

アスターがシルヴィアの手を戒めている縄を断ち切り、彼女の腕を引くと、いつの間にか傍に寄ってきていた馬に乗せ、自らも騎乗し、丘を疾走した。

「おっ追えー！ 奴らを逃すなー！」

その鮮やかな手際に呆けていた男たちも我に返り、馬に乗って、急いで二人のあとを追っていった。そして逃げる二人はというと、馬上に乗せられたシルヴィアが後ろにいるアスターを責めているところだった。

「どうして、一人で来られたのですか！ リリィアードの第一皇子と

もあろうお方が、無謀すぎます」

アスターはフンと鼻で笑う。

「俺は鬼神アスターだぞ。シェファーズの兵士ごときにやられるか」

「ですがっ」

「なんだ？ 俺のことを心配しているのか？」

「えっ？」

シルヴィアは戸惑いの声をあげた。

『心配？ アスター様を？』

「冗談だ。本気にするな」

アスターは、笑っている。しかし、シルヴィアは笑えなかった。今まで意識したことがなかった事実を突きつけられたような気がした。

恋の自覚3

「こっちに逃げたぞー！ 追えー！ー！ー！」

追っ手たちの声が聞こえる。手綱を握るアスターの手に力がこもる。ハッと現実に戻されたシルヴィアは、頭を軽く左右に振り、余計な考えを振り払った。今はそんなことを考えている暇など無い。

「しっかり掴まってろ！ シルヴィア。振り落とされるなよ！」

「はい」

シルヴィアの返事を聞くや否や、アスターはさらにスピードを上げた。

だが、二人乗りの馬では追っ手を撒くほどのスピードは望めない。このままでは追いつかれてしまう。そのとき追っ手たちから矢が放たれた。

ビュッビュッビュッ

「きゃーっ」

「くっ」

アスターは馬を巧みに操り、矢を避ける。先ほどのように剣で矢を払いのけられればいいのだが、シルヴィアがいるので、そういうわけにもいかない。剣を抜き、振り回せば、誤ってシルヴィアを傷つけかねない。

『くそっ』

アスターは唇を噛み締める。そのとき、遅れて放たれた一矢がアスター目掛けてとんできた。しかし、対策を講じていたために気がそれ、背後の注意を怠ってしまったため反応が遅れる。

ドスッ

「ぐっ…」

「アスター様っ！」

その矢はアスターの背を正確に射抜いた。

ビュッ

再び第二矢が飛んでくる。

ドスッ

「ヒヒーン」

すると、今度は二人が乗っている馬の足に刺さった。馬はそのまま走り続けることも、止まることもできず倒れこむ。

「きゃーー！」

その勢いで二人は草むらの中に放り出された。

「いたっ」

シルヴィアは身を起こし、後ろを振り返る。
そこには矢が突き刺さった肩を押さえ、うずくまっているアスターの姿があった。

「アスター様！」

急いでアスターのもとへ駆け寄る。だが、アスターは駆け寄ったシルヴィアを無言で突き飛ばした。

「きゃあ」

シルヴィアはアスターを見つめる。

「アスター様……」

肩を押さえたアスターはシルヴィアを睨み付け、言った。

「行け……」

低い声でアスターは叫ぶ。

「行け。シルヴィア！」

有無を言わさぬ強い口調。アスターの決意と覚悟を感じた。シルヴィアは青ざめながら首を横に振る。

「いいから。行け！」

シルヴィアは再度首を横に振り、その場から立ち去ろうとは決してしなかった。むしろ震えながらもアスターの傍へと舞い戻る。そして、シルヴィアはアスターの無傷の方の肩の下に体をいれ、アスターを立ち上がらせようとした。

「やめろ」

シルヴィアは無言でアスターの体を支え、そのまま森の中を進んでいく。

「やめろ……」

アスターの言葉に耳を貸さない。

「やめろ！ シルヴィア！」

小柄なシルヴィアが自分をつれ、逃げるなど不可能だ。だが、奴らの狙いはシルヴィアではない。自分だ。シルヴィアだけなら逃げ切れる可能性が高い。

「もう、やめろ！ 一人で行け！」

アスターが怒鳴る。

「いやっ！」

負けじとシルヴィアも叫ぶ。自分の思い通りにならないシルヴィアにアスターは苛立った。

「お前がいても何も変わらん！ 行け！」

「いやよ!」

なおも拒絶するシルヴィア。

「見殺しになんて……できない。」

口から搾り出すように声を出す。

そのとき、アスターの心になんとも言えない感情が芽生えた。

「俺は……。お前の国を滅ぼした張本人だぞ」

シルヴィアは額に汗を浮かべ、微笑みながら答えた。

「ええ」

「俺は、お前の父を殺した人間だ」

「分かっています」

苛立つアスターは激昂した。

「シェファーズを滅ぼすよう進言したのは、この俺なんだぞ! シェファーズが気に入らないという理由だけで!」

「それでも!」

シルヴィアがアスターの言葉を遮る。

「それでも……。放っておけないんです」

「…どうして」

アスターはぼつりと呟く。その言葉にシルヴィアは唐突に自覚した。もうごまかすことはできなかった。アスターを見殺しにできないのは何故なのか。これが自分の気持ちを伝える最後の機会かもしれない。そう思ったら、今の自分の感情を素直に受け入れることができた。怨みも憎しみも悲しみもすべて取り払ったあと最後に残った自分の思い。それを告げる。

「…好きなんです」

恋の自覚4

アスターがシルヴィアの横顔をみつめる。

「好きなんです。あなたのことが」

シルヴィアは前を見据え、歩みを止めようとはしなかった。

「だから、死んでほしくないんです」

束の間の沈黙ののち、顔を背けたアスターは短く吐き捨てた。

「馬鹿が……」

その言葉にシルヴィアは笑う。

「そうですね」

本当に、その言葉通り自分は馬鹿な女だ。仇を愛してしまうなど。愛してしまう要素など何一つなかったはずだ。自分を苦しめ、さいなむことはしても優しくされたことなど、ほとんどなかったのに…。

「俺は…お前を愛しているわけではない。俺には、そんな感情などない」

「はい。それでもいいのです。わたしが勝手にあなたをお慕いしてしまっただけですから」

そんなシルヴィアの見返りを期待しない無償の愛にアスターは、どう答えていいか分からなかった。一途なシルヴィアの愛に返せるものなど何一つ持っていない己には……。

「いたぞー！ こっちだ！」

追っ手の声に二人はハッと後ろを振り返った。右からも左からも追っ手が迫る。彼らの手には剣が握られていた。アスターを連れ、シルヴィアはさらに森の奥へと逃げようとした。が、立ち止まる。そこは坂になっていたからだ。進めば転がり落ちてしまう坂が。

「逃げ道はないようだな」

追っ手が二人を取り囲む。前方には追っ手。後方は急斜面。最早、逃げ道などどこにもなかった。追っ手たちが徐々に近づく。薄気味悪い笑みで。シルヴィアは両手をひろげアスターをかばい、追っ手たちの前に立ちはだかる。

「シルヴィア様。そこをどいてくださいますか？」

追っ手の一人が話しかけてくる。

「一応、あなたはシェファーズの姫ですから殺したくはありません。ローザリオンからできればと言われていますからね」

『ローザリオン！』

長年の敵国の名にアスターは顔をゆがめる。

『奴らがひそかに動いていたとは、うかつだった』

なんとしても、この危機を乗り越え王城に戻らねばならない。アスターはじつと隙をうかがう。

「さあ、そこをどいてください」

顔から表情を消し去ると、剣を強く握り歩み寄ってきた。その場に殺気が満ち溢れる。

気圧されるようになるがシルヴィアは、追っ手をにらみつけ、ぐつとその場に留まった。

「はあゝ。仕方ありませんね」

片手で顔を覆うと追っ手はため息をついた。

「では、鬼神共々あの世に行ってください」

追っ手の一人がシルヴィアに向け剣を振り上げた。シルヴィアは覚悟を決め、目を瞑る。

ザシュツ

肉が切られる音がしたかと思うと強い血のにおいがたちこめた。しかし、シルヴィアの体に痛みはない。あるのは温かい腕と胸板の感触。

シルヴィアはそーっと眼を開けた。

「アスター…様」

かばっていたはずのアスターに逆にかばわれていた。アスターの体が崩れ落ちる。

それを支えきれず彼の背に手をやり、シルヴィアは膝をついた。手にアスターの流した血がつく。

「アスター様！ アスター様！ しっかりしてください」

シルヴィアは必死に声をかける。意識はまだある。アスターは力を振り絞るとシルヴィアの体を横に突き飛ばした。

「あっ」

身を起こしたシルヴィアが次に見たのは信じられない光景だった。アスターの脇腹に剣が吸い込まれていく。シルヴィアは両手をこめかみにあてると絶叫した。

「いやーーーーー！」

そして、アスターは脇腹に剣が刺さった状態のまま坂を転がり落ちていく。そのとき一瞬、アスターが微笑んだように見えた。しかし、シルヴィアが精神が耐えられたのはそこまでだった。シルヴィアは涙を流したまま意識を失う。追っ手たちの歓喜の声を遠くにかんじながら。

「やった！ とうとうやったぞ。鬼神を倒した！」

興奮気味に語る兵士。

「ところで、シルヴィア姫はどうする？」

「ローザリオンに引き渡せばいいだろう？」

「そうだな。できればシルヴィア姫も取り込みたいようだったしな」

「ふん。気にいらねえな。国を鬼に売り渡した売国奴など殺してしまえばいい」

「俺たちにとって邪魔になれば、あの方がうまく始末してくださいさるさあ」

その言葉に男は頷く。

「そうだな。あの方にすべてお任せすればいい。シェファーズの正統な王位継承者であるディアナ様の母君。アルグリア様にな」

追っ手たちは剣をおさめると、意識のないシルヴィアに近づいた。彼女の閉じられた瞳からは幾筋もの涙が流れ落ちていた。

神の娘

第五章 神の娘

「いやー。アスター様！」

叫ぶのと同時にシルヴィアは跳ね起きた。ハアハアハアと息が荒い。汗で前髪が額に張り付いていた。

「夢？」

「夢じゃないさ。お姫様」

鉄格子越しにひげもじゃのおじさん看守がシルヴィアに答えた。見たこともない男が突然目の前に現れ、シルヴィアは驚きのあまり声も出ない。

ジャラ

鎖がこすれる音。手首を見ると手枷がはめられていた。足枷の次は手枷。自分はよほどこういう目に遭いやすいのだろうか。

「ここは、一体」

シルヴィアが尋ねるとおじさんは憐れむような眼差しでシルヴィアを見る。

「ここは、ローザリオン。シェファーズとの国境近くの場所だ」

「ロー…ザリオン…」

確か誰かがローザリオンの話をしていたと、シルヴィアは己の記憶の糸を手繰り寄せた。

『一応、あなたはシェファーズの姫ですから殺したくはありません。ローザリオンからでもできればと言われていますからね』

そう言っていたのはシェファーズ近衛軍の兵士たちだった。自分は利用されたのだ。アスターを亡き者にしたいローザリオンによってアスターの最後の姿がまぶたに焼き付いて離れない。

「アスター様」

小声で呟く。

「アスター？ 鬼神アスターのことか？」

おじさんが彼の名に反応した。シルヴィアは牢屋の粗末なベッドから飛び出すと鉄格子にかじりつく。

「おじさん。アスター様を知っているのですか？」

「おじっ…」

少女におじさんと呼ばれたのが相当ショックだったのか顔をひくつかせていた。

「知っているのなら教えてください。アスター様はどうなったので

すか？」

おじさんは表情を引き締めると鉄格子に歩み寄り、床であぐらをかいた。

「お前さんを運んできたやつらは死んだと言っていた」

「！」

シルヴィアの顔が強張る。

「自分たちの手で鬼神を殺したと」

「…そんな」

唇を噛み締め静かに泣くシルヴィアの頭をおじさんが優しくなでる。

「ここには、俺しかいねえ。我慢することねえ。思いっきり泣け」

その言葉が張り詰めていたシルヴィアの精神の糸を断ち切る。

「ううううう。あああああああ。あああああああ」

涙が後から後から溢れてくる。苦しくて息がうまく吸えない。痛い。胸も頭も心も痛い。

「あああああああああああああ」

シルヴィアは言葉にならない声をあげ、泣き続けた。そしておじさんは格子越しにシルヴィアの涙が枯れ

果てるまで彼女の頭をよしよしとまで続ける。

「うっ、うっ、うっ……。ひく。ひっく。ひっく」

しゃくりあげながら涙するシルヴィアにおじさんは静かな口調で言った。

「姫さん、おまえさんは、鬼神アスターが本当に死んだと思うか？」
少しの沈黙の後、シルヴィアは口を開いた。

「わかりません。身体に剣を突き立てられたまま坂を転げ落ちていつてしまいました。可能性は低いことはわかっています。でも認めたくないんです。奇跡を信じたい。生きていらつしやると…、信じたいんです……」

「そうか。なら、誰がなんと言おうと、信じ続ければいいさ」

「おじさん」

「姫さんは、鬼神アスターに会いたいんだろ？」

こくりとシルヴィアは頷く。

「だったら、この状況を打開してシェファーズに戻らんな」

シルヴィアはハツとした。今まで、自分はその場の状況に流されてきただけ。

そのせいでアスターは窮地に立たされたのだ。すべては自分の弱さが招いた結果。

自分から動かなければ、また同じことの繰り返し。それだけは嫌だ。少しの沈黙の後、シルヴィアはスーハースーハーと深呼吸をするとおじさんの顔を真剣な表情で見つめる。

「おじさん。ここはローザリオンの監獄なのですか？」

行動を起こすためにはまず自分の置かれている状況を把握しなければならぬ。

シルヴィアはおじさんからできるかぎりの情報を得ることにした。

「いや？ 監獄じゃない。ここはローザリオンの有力貴族が所有する別荘だ」

『ローザリオンの有力貴族！ まさかっ！』

シルヴィアの脳裏にローザリオン屈指の名家の名前が浮かんだ。

「マルリオーザ侯爵家」

おじさんは驚いた顔をした。

「そうだ。ここはマルリオーザ侯爵家の別荘だ」

シルヴィアの推測を肯定する言葉が耳に入った途端、雷に打たれたような衝撃がはしった。

「ここにいらっしゃるのですか？」

「誰が？」

「シェファーズ王妃アルグリア様です」

「…ああ」

シルヴィアは自らの胸元を握り締めた。

「すべては、アルグリア様が仕組んだことなのですね」

「……」

おじさんは肯定も否定もせずただただシルヴィアの言葉を聞いていた。

「アルグリア様がローザリオンを動かして」

握り締めた拳から血が滴り落ちる。

「っ」

初めてだった。こんなにも憎いと思ったのは。どんなに殴られようとも。どんなに蹴られようとも。憎いと思ったことはなかった。どんなに罵倒されても、悲しいとしか感じなかったのに。怒りに身体全体が震える。焼け焦げた大地。濁った湖。絶命した兵士たち。お父様。歓喜の声をあげた国民たち。そして…。

「やっと、戦が終わったのに…。己の欲望のために、また踏みに行きというの？ シェファーズの大地を。そして民たちを」

しかも、今度はそこにリリィアード人たちも加わるのだ。

「止めなければ……。なんとしても、止めなければ」

もう見たくなかった。誰かが死ぬところなど。そんな悲しい思いは、二度としたくなかった。そして誰にも味合わせたくなかった。シルヴィアの瞳に強い光が宿る。彼女の変化を黙って見守っていたおじさんは驚きに目を見張る。そして一瞬で彼はその瞳に射抜かれた。そのとき、コツコツコツと階段を降り、こちらへと近づいてくる複数の足音が聞こえてきた。体中に駆け巡った衝撃から意識を取り戻したおじさんは立ち上がり、シルヴィアを激励した。

「姫さんよ。勝負のときが来たようだぜ」

シルヴィアは無邪気に笑うとおじさんに尋ねた。

「いろいろ、教えてくれてありがとうございます。あなたのお名前を伺ってもよろしいですか？」

おじさんはきよとんする。

「俺なんかの名前を聞いてどうすんだ？」

「恩人のお名前を聞くのは当然のことです」

彼は照れたようにガシガシと頭をかく。

「恩人なんて、たいしたことはしてねえさ」

シルヴィアはくすつと笑い、再度尋ねた。

「お名前をお聞かせ願えますか？」

おじさんもフツと笑うと初めて自分の名を口にした。

「俺の名はモシヤスだ。シルヴィア姫」

神の娘2

コツコツコツコツ

複数のローザリオン兵に連れられ、牢屋を出たシルヴィアは、まず浴室に連れて行かれた。

そこで体の汚れを落とした後、用意された衣服を身に着け、また別の場所へと連行される。

もちろん手枷もはめられたままだ。少し歩くと先導していた兵士がある部屋の前で止まった。

「失礼します。シルヴィア様をお連れしました」

扉の前で兵士が声をかけると中から女性の声が聞こえた。

「お入りなさい」

「はっ」

扉が開かれる。背筋を伸ばし、一步、また一步と足を動かす。そこには中央の一段高い位置に艶然と腰掛ける一人の貴婦人がいた。その手には彼女愛用の扇子が握られている。

以前は彼女を見るだけで体が震えたものだ。顔をつき合わせれば、罵声を浴びせられ、手を上げられることは分かっていたからだ。だが、今は違う。彼女と最後に会ったときから、なんと自分たちの立場は変わってしまったことだろう。あれから、一ヶ月も経っていないというのに。二人は無言で視線を交わしあう。沈黙を破り、先に口を開いたのはアルグリアだった。

「ごきげんよう。シルヴィア」

彼女のいつものあいさつだった。

「お久しぶりでございます。アルグリア様」

シルヴィアは手枷をはめられた状態ながらもドレスの裾を両手で持ち上げ、礼をする。その堂々とした様子にアルグリアは軽く目を見開いた。いつも自分の前ではオドオドしていた少女が今ではまっすぐ見てくる。シルヴィアの変化を見たアルグリアの瞳に憎悪の炎が燃え上がった。

『しばらく見ぬ間にますますあの女に似てきおった』

扇子を握る手に力がこめられる。

「シルヴィア。あの戦の最中よく生きておったのう」

国を捨て、シルヴィアを見殺しにしようとしたことなど、なかったかのような言動にシルヴィアの肩がピクリと動く。しかし、シルヴィアもそんなことがあったことは、おくびにも出さず穏やかな微笑をアルグリアに向けた。

「ええ。わたくしも、そう思います」

シルヴィアからは動揺など一切感じられない。想像したような反応が得られず内心アルグリアは苛立った。

「しっかし、そなたが生きていたことにも驚いたが、その後届い

た知らせには驚いた」

シルヴィアは意味が分からず軽く首を傾げる。

「その身一つであの鬼神を籠絡するとは……。いやはや驚いた」

「！」

シルヴィアは何も答えることができなかった。アルグリアはさらに言葉を重ねる。

「わたくしでは考えつかぬ策だ。父の仇に体を売るとはのう。見返りはなんじゃ？ シェファーズの王位か？ それともリリアードの次期皇妃の座か？」

アルグリアの侮辱に心が揺さぶられる。しかし、アスターの顔を思い浮かべ、必死に耐えた。アルグリアの挑発に乗ることは簡単だ。だが、冷静さを失えば、この窮地を乗り切ることなど不可能。シルヴィアは、荒立つ心を押し隠し、熱のこもらぬ言葉を吐き出した。

「それは誤解です」

「誤解？」

アルグリアも口角をあげ、こちらを見る。

「リリアードはシェファーズの統治を確固たるものにするため、わたくしを利用しただけに過ぎません。」

「そなたの意思ではないと？」

「はい」

「では、王城での演説もか？」

「…ええ。そうです。脅されたのです」

嘘ではなかっただが、完全な真実でもなかった。脅されたのは確かだが、そんなことがなくても、恐らく自分は同じことを言っていただろう。もう誰かが傷つくところを見たくなかったから。アルグリアは椅子から立ち上がるとゆっくり近づいてきた。だが、シルヴィアの目の前に立ったとたん彼女の表情は一変する。手に持った扇子をシルヴィアのこめかみ目掛けて力いっぱい振り下ろした。

ガッ

シルヴィアの体が倒れる。

ポタ、ポタ

床に血が滴り落ちる。アルグリアは身をかめるとシルヴィアの前髪を引っつかんだ。
自然と顔が上を向く。

「くっ」

痛みに顔が歪む。

「そんな見え透いた嘘がわたくしに通じると思っているのか！」

凄まじい形相でシルヴィアをにらみつけた。

「報告は受けておる。そなた、シェファーズの兵士に協力するどころか、鬼神をかばったそうだな！ この売女！」

アルグリアは狂ったように手にした扇子でシルヴィアを叩き続けた。

「リリアードに身も心も売り渡すとは、それでもシェファーズの王族か！」

シルヴィアの拳を握る手に力が入り始めた。

「父を目の前で殺されながら、その仇に取り入るなどと汚らわしい。やはり、お前はあの恥知らずな女の娘だ！」

我慢の限界だった。

ドンッ

「きゃーー」

シルヴィアに両手で突き飛ばされ、アルグリアの体が倒れる。彼女が呆然と見上げると、そこには立ち上がったシルヴィアがいた。

「わたしのことは、なんと言われようともかまいません。ですが！ お母様を侮辱することだけは許しません！」

初めて見るシルヴィアの姿に、アルグリアは驚く。そこには震え、怯える小動物のようなシルヴィアはもういなかった。屈辱に身を震わせるアルグリア。

「無礼者。アルグリア様に何をする！」

傍に控えていた兵士たちは、慌ててシルヴィアの体を床に押さえつけた。

『許さぬ』

怒りの炎をたぎらせ、アルグリアは決意した。

「陛下は、お前を生かして連れてこられるように命ぜられたが、その必要はないことが今、分かった」

シルヴィアは黙ってアルグリアをにらみ続ける。

「リリアード側の人間など要らぬ。それどころか邪魔なだけじゃ。その前に処刑してくれるわ」

勝ち誇ったかのようにアルグリアは兵士に命じる。

「この者は国を裏切った売国奴。今すぐ表にて首切るがいい」

「はっ。かしこまりました」

「立て！」

シルヴィアは引っ立てられる寸前アルグリアに向かって叫んだ。

「あなたはシェファーズの真の王妃などではないわ」

その言葉だけ残して扉がパタリと閉められた。

「ふん。何とでも言うがいい。最後に勝つのはこの『わたくし』なのだから」

これが、かつての王妃と王女が完全に袂を分かった瞬間だった。

神の娘3

「さあ、こっちに来い」

シルヴィアは兵士たちに両脇をとられ、引きずるように連行された。小柄で非力なシルヴィアではどうすることもできない状況だ。

『ごめんなさい。アスター様』

彼が命がけで守ってくれたこの命。無駄にはしたくなかった。そして、もう一度会いたかった。会って、彼の声をもう一度聞きたかった。けれども、これから赴くは処刑場。もうすぐ訪れる最期のときを前に、シルヴィアの胸は張り裂けそうになっていた。そうして一歩一歩死へと向かう彼女の首筋に突然、熱い吐息が吹きかけられた。

「何っ！」

不快な気配に、顔をゆがませ、飛びのこうとするが、拘束されているシルヴィアに自由はなかった。目の前にせまる下卑た笑いの兵士が、そむけようとする彼女のあごをくいっと持ち上げた。

「美しいな。リリアードの鬼神が、溺れるのも分かる」

「おい。何をしてる」

もう一人の兵士が咎めようとするが、男はシルヴィアを放そうとしない。

「へへへっ。どうせ殺すんだ。その前に味見してもかまわないだろう」

そういうと、シルヴィアの体を乱暴に抱え、手近な部屋に連れ込んだ。

「きゃあ」

その男はまるで獣のように床に倒されたシルヴィアの上に覆いかぶさり、ほのかに香る彼女の首筋に顔をうずめる。

「いやっ、やめて！」

顔を左右に振り、手足をばたつかせ、力の限り抵抗するが、男はびくともしない。

細い手足のシルヴィアが暴れたところで、常に訓練している成人男子にとっては子猫に引っかけた程度

のものだ。だが、手間のかかる様子に男は苛立ち、そばにいる同僚に加勢を頼む。

「ちっ。おい、こいつの手を押さえろ」

その言葉に兵士は難色を示す。

「そんなことより下された命令を早く遂行すべきだ」

しかし、男の欲情は、冷静な言葉一つで止まる領域を超えていた。

「だから、早く命令を遂行するために、力を貸せよ。こんな上玉を抱ける機会なんてもう一生来ないぜ。しかも、あの鬼神が抱いた女

を俺の手で汚してやれる。これほど名誉なことはないだろう？」

男の気が変わることがないのを悟ると、兵士はあきらめたようにため息をついた。男の言うとおりにして、さっさと処刑してしまいたかったからだ。

「仕方がないな」

兵士は手枷をはめられたシルヴィアの手首を床に縫い付ける。

「へへっ。これで、動きやすくなった」

そういうと男は、シルヴィアのドレスの裾をビリビリっと破り、白い足をあらわにする。

「美味そうな足だ」

舌なめずりをし、ごつごつとした大きな手で彼女のしなやかな足を撫で回した。

「いやっ！」

男が自分の体に触れるたびに、悪寒が体中にはしり、まるで陸に打ち上げられた

魚のように、その場で跳ねる。

「いやー！ やめてっ！」

彼女の瞳から飛び散る雫。その様子が逆に男の嗜虐心と征服欲をおおるとは知らず彼女は抵抗しつづける。

「たまんねえ」

その言葉と同時にシルヴィアの固く閉じられた両足を強引に割り、そこに己の体をさし入れてきた。シルヴィアは、恐怖におののき、真っ青な顔で男を見つめる。

「そうさ。もうすぐ、これをお前につつこんでやるから、楽しみにしていな」

下品な言葉にシルヴィアは気を失いかけ、その隙に男はシルヴィアの胸元をまさぐり始める。心も体も恐慌状態に陥り、意識が闇に落ちていく。自然と力の入っていた腕が力なく床に投げ出された。それを感じとった兵士がゆっくりと彼女の両腕から手を放す。そして、男に体を好き勝手にされながら、シルヴィアは静かに涙した。

『こんな男に、犯されるくらいなら』

シルヴィアの脳裏に浮かんだ言葉。それを実行するため、シルヴィアは、自分の齒に力をこめる。そのとき、シルヴィアの耳に、シャランシャランという音が足元から聞こえた。それは、アスターによつてはめられた銀のアンクレットの音だった。それを意識した途端、目の前にアスターの姿が現れた。彼はシルヴィアの耳元に唇を寄せ、こう囁いた。

『もし、お前が俺の意に反することを行えば、シェファーズ国民の命はないと思え』

シルヴィアの目が見開かれ、闇に堕ちていた視界が開けた。アスターの言葉がシルヴィアの心を暗闇から連れ出し、アスターの声がシ

ルヴィアを奮い立たせる。そして、彼のことを思い出した。

『行け！ シルヴィア』

シルヴィアは投げ出されていた腕を振り上げ、両手首をつなぐ鎖を男の顔面にぶつけた。

「うがっ！」

突然の反撃に男は顔を押しさえ、シルヴィアの体から飛びのく。すかさず、シルヴィアは男の腰に飛びつき、そこにある短剣を鞘から引き抜いた。そして、そのまま部屋の扉から逃げ出そうとするが、われに返ったもう一人の兵士に、進路を阻まれ、逃げ場を失う。

「この、女^{アマ}！」

そして鼻から血が滴り、顔面を血で汚した男が怒りの瞳をシルヴィアにおくり、彼女の背後に立ちはだかった。シルヴィアは厳しいまなざしで、二人に短剣を向け、後ずさりする。

『死ねない。こんなところで死にたくない！』

その想いを支えにシルヴィアは、壁を背に、短剣を握り締めていた。面目をつぶされた男は、怒りに身を震わせ、徐々に近づいてくる。

「そんなに死にたいなら、ここで殺してやる！」

そう吠えろと男はシルヴィアにつかみかかろうとした。

神の娘 4

だが、男の腕にシルヴィアが捕まることは二度となかった。

突如ガッシャーと窓ガラスが音を立てて割れ、そこから、一人の男性が飛び込んできたからだ。

「なんだ！ てめえ！」

そう言い終る間もなく、一瞬で懐に入り込まれ、剣でその体を切り上げられた。

飛び散る血しぶきと共に、男の瞳から命の輝きが消える。その屍を踏み越えて、男性は、シルヴィアを抱きしめた。

「姫。よくご無事で」

彼の安堵の声を耳元で聞き、彼の体温を体全身で感じ、生きている実感に新たな涙があふれ出る。

「…イオル様……」

イオルは、そっと彼女から体を離すと、シルヴィアの手を包み込む。すると、そこから短剣がこぼれ落ち、カラーンと床に落ちていった。それを見届けたイオルはシルヴィアを安心させるように、微笑んだ。

「遅くなって、すみません。もう大丈夫です」

それから、イオルは、シルヴィアを自分の背にかばうと、改めて扉の前に立ちはだかっているもう一人の兵士をにらみつける。その殺

気のこもった両眼に体が震える。

「うわぁ！」

怯えた兵士はきびすを返し、ノブに手をかけ、扉を開いた。地獄から、現世へと帰還するため、一歩足を踏み出したが、次の瞬間、鉄の塊のような拳に体が押し戻されていた。

バキッという鈍い音がしたかと思うと、逃げようとした兵士の体は床に叩きつけられた。

そして、開け放たれた入り口から、駆け込んできたのは、誰であろう牢屋番のモシヤスだった。

「えっ！ モシヤスさん？」

予想外の人物の登場に、驚くシルヴィアを尻目に、モシヤスは手にした鍵で彼女の手枷を外した。

「イオル。急げ。今の音で、すぐ兵士どもがやってくる」

「わかった」

モシヤスの言葉にうなずくと、イオルはシルヴィアの腰に手を回し、大事そうに片腕で抱き上げる。そして、進入した際に使った館の屋上から垂れ下がっているロープを握りしめ、壁面を伝い、下の大地に降り立った。そのあとに、モシヤスも続く。

「こっちだ。イオル」

モシヤスの先導でイオルは館を囲む森の中へと分け入る。シルヴィアの手を引きながら。

しばらくすると、森の中の街道に出た。そこには数頭の馬とそれにまたがっている男性が数人いた。皆、質素な身なりをしているがよく見れば鎧を着込み、手には弓などの武器を持っていた。その中の一人がこちらを振り返る。

「イオル様！ ご無事でしたか」

彼らは馬から下りるとイオルに駆け寄り、ひざをついた。それだけで彼らがイオルの直属の部下だと分かる。

神の娘5

「おしっ。全員そろったところで、さっさとずらかろうぜ」

モシヤスの提案に、イオルも賛成するかのようにうなづく。イオルに対するモシヤスのぞんざいな言動と、それを許容するイオルの態度にシルヴィアは首をかしげた。

「あの、モシヤスさんは一体……」

シルヴィアの戸惑いに、モシヤスはガシガシッと頭をかきつつ、自らの正体を明かした。

「ああ、俺は間者なんだ。リリイアードのな。リリイアードのシェファーズ侵攻と前後して、ローザリオンを探っていたんだ。アスターの命令で」

『アスター』という名にシルヴィアは、イオルの方をさがるようにみつめた。

「イオル様。アスター様！ アスター様は……」

緊張して声が震える。最後まで言葉を紡ぐことができなかった。聞きたいけれど、聞きたくない。そんな複雑な心理状態だった。

それを察したイオルは、シルヴィアの体を馬上に乘せ、的確に彼女の聞きたいことを話してくれた。

「アスターは生きていますよ」

シルヴィアは上から真摯なまなざしでイオルを見下ろした。

「それは、本当ですか？」

まだ信じられないようで、再度確認してくる。イオルもまた同じ答えを繰り返した。

「ええ。生きています」

シルヴィアの瞳から涙が溢れる。しかし、その涙はいつか見たことのある悲哀の涙ではなく、初めて見る喜びの涙だった。

「よかった。よかった。本当によかった」

全身から彼女の喜びが伝わる。だが、予想外の彼女の反応にイオルの心境は複雑だった。

あのとき以来自分の前ではもちろんアスターの前でも笑うことなどなかったシルヴィア姫が、こんなにもアスターが生きていることに対して喜ぶとは思わなかった。アスターが姫にしてきた仕打ちを考えると尚更だ。イオルは『もしや』と思った。そして、その予想は外れてはいないだろう。いいことだとは思えない。なぜなら、アスターはあの性格だ。シルヴィア姫が幸せになれるはずがない。心の中がもやもやする。出口の見えない迷路に入り込んでしまったような感覚だった。

「それで、お怪我のほうは……」

シルヴィアの声にイオルは揺れる心をすっと奥底に隠し、何事もなかったかのように話を続けた。

「はい。決して軽い怪我ではありません。本当なら絶対安静なのですが……」

そこまで言ってイオルは後悔した。ここへ来る前にアスターから口止めされていたのだ。

「イオル様。アスター様はベッドで治療を受けているわけではないのですか？」

不安そうなシルヴィアに言うべきかどうか考えあぐねていた。

「教えてください。イオル様。アスター様は今どちらにいらっしゃるのですか？」

『滅びたとはいえ自国のことだ。彼女には知る権利がある』

イオルはハッと息を吐くとシルヴィアに現在の緊迫した状況を語った。

「ローザリオンの軍が国境を越え進軍中との報告がありました」

あまりのことにシルヴィアは言葉を失った。

「ローザリオンはリリアードの支配を良しとほしないシェファーズ軍の残党兵を取り込み、王女ディアナを旗印に進軍してきたのです」

「ディアナお姉さま……。お姉さまも軍に？」

「いや、彼女はいませんが、リリアード軍をシェファーズから追い出したあと、入城しにくるはずです」

イオルの言葉にシルヴィアは納得した。兵士がやってくると怯えていたディアナが軍に加わるはずがないし、命の危険がある所にアルグリアがディアナをやるわけがない。

「それで、ローザリオン軍は今どこに」

「ロンバルディア平原です」

ロンバルディア平原。ローザリオンとの国境近くにある広大な平野。青々とした草原が広がり、民たちはそこに家畜を放ち生計を立てている。

「アスター様もそこに？」

「はい」

「あのお怪我で？」

「ええ。鬼神が負傷したと聞いて兵士たちの士気が落ち込んだのです。これで、戦いでないということになれば、脱走するものも増えるのではないかと…。止めたのですが、アスターは強情ですからね」

その言葉にシルヴィアの意志は固まった。

「わたくしも行きます」

「えっ？」

イオルは我が耳を疑った。

神の娘6

『今とんでもないことを聞いたような……』

「すみません。姫。今なんと」

「わたくしも行く申し上げたのです。ロンバルディア平原に」

イオルは慌てた。

「無茶です。危険すぎます」

しかし、シルヴィアの決意は変わらなかった。

「この戦、誰かが止めなければなりません」

前方を見据え、強い意志を秘めた声音で意思表示をする彼女に、イオルは驚きを隠せないでいた。

『この姫は誰だ』

イオルは初めて会う人間のような眼差しでシルヴィアを見た。初めて出会ったとき可憐で儚い小鳥のような印象しかなかった少女。今の彼女には有無を言わさぬ迫力と気迫が備わっていた。

「ロンバルディアが戦で踏みにじられれば、家畜を養うことができなくなります。牛馬が減れば、労働力として活用しているだけに農作業にも支障をきたし、作物の生産量も減るでしょう」

鋭い考察力に舌を巻く。

「それに、見たくないのです」

シルヴィアは悲しそうに自分の気持ちを明かした。

「また、シェファーズとリリィアードの人間が戦うところを」

「姫」

「わたくしは、シェファーズ人です。でも、半分はリリィアードの血を引いています」

シルヴィアの言葉にハッとする。

「わたくしが愛する祖国の民と母の愛する祖国の民が争うところなど、もう見たくないのです」

「姫…」

この心優しい少女がずっと悲しんでいたことに今、気がついた。母の祖国を怨みたくないのに怨んでしまうことに。

「ですから、止めたいのです。戦を。いえ、止めなければなりません。それにアスター様をお助けしたい」

偽ることをしないシルヴィアの最後の言葉にイオルは不思議でならなかった。

「私なのですが、アスターは姫の仇です。その仇を助けたいと本気で思っているのですか？」

シルヴィアは再びイオルを見ると穏やかな微笑で是と答えた。

「どうして」

イオルには全く理解できなかった。その理由をシルヴィアは簡潔に述べた。

「好きだからです」

その時の衝撃は一生忘れられないだろう。予感があった。だが実際に耳にしてみると恐ろしいほどに威力のある一言だった。

「…だめです」

イオルは拒絶した。

「イオル様？」

「…あなたをロンバルディアには行かせられません」

完全な拒否にシルヴィアが食って掛かった。

「行かなければならないのです。行かせてください」

「だめです」

馬の手綱をしっかりと握り締めイオルは答えた。

「どうして！」

今度はシルヴィアがイオルを問いたです。

「武器も扱えぬ方をそんな危険なところに連れて行くわけにはまいりません。それに、姫が出向いても何も変わりません」

「……」

正論だった。そう言われれば、何も言えない。だが、そんなことは百も承知。シルヴィアは引かなかった。

神の娘 7

「わたしは、…この短い期間で後悔ばかりしたわ。何か行動を起こしていれば、こんなことにはならなかったのにと」

言葉遣いが変わった。先ほどまで敬語で話していたのに急にだ。イオルは何かを感じた。

「もう、そんな後悔なんてしたくない！」

そういうとシルヴィアは馬のたてがみを思いっきり引っ張った。ヒヒーンと馬がいなき、棹立ちになる。

「なっ！」

油断していたイオルは、馬の勢いに振り回され、後ろにひっくり返った。

ドサッ

「っ」

痛みにうめくイオルを申し訳なさそうに顧みたが、彼女はそのまま馬を駆り、走り去っていった。

「イオル様！」

突然のことに部下たちは、イオルに駆け寄る。

「イオル様。大丈夫ですか？」

そんな部下たちをイオルは叱責し、怒鳴りつけた。

「俺のことはいい！ 姫を追えー！ ロンバルディアに向かった」

「はっはい」

「わかりました」

姫を追う部下たちを見送るイオル。そこにまだ一人残っていた。

「見事にやられたな」

モシャスだ。

「で、どうするよ。お坊ちゃん」

おもしろそうにフツツと笑っている。してやられたイオルは不機嫌そうに馬上のモシャスを見上げる。

「姫を守る。それだけだ」

イオルはシルヴィアが消えた街道を見つめ続けるのだった。一方、シルヴィアは馬を駆り、ロンバルディアへ向かっていた。強い意志に導かれて。シルヴィアは馬に一人で乗ったことなど今までに一度もない。普通なら馬に振り落とされたり、自分の意思どおり動いてくれないこともあっただろう。だが、このときは違った。なにか普通とは違う力を感じていた。

『お願い。ロンバルディアへ急いで』

そう念じるだけで、自分の意思が馬に伝わるようだ。馬の走る速度が上がる。

『アスター様。アスター様。無事でいて。お願い』

シルヴィアは心の中でアスターの名を呼び続けるのだった。

神の娘 8

漆黒の鎧を身に着け、戦場にいたアスターはふと空を見上げた。

「どうかされましたか。アスター様」

アービスが気を遣う。

「お加減でも悪いのですか？」

心配そうにこちらを窺う。

「今、シルヴィアの声が……」

「え？」

『シルヴィアの声が聞こえた』

そう言いかけてやめた。ただの幻聴だ。

「いや、何でもない」

平静を装い、無表情に答えるアスター。それを見守るアービスの表情が曇る。

「アスター様。少しお休みになられた方がよろしいのでは？」

「いつローザリオンが動くか分からんのに、休んでなどいられるか」

ここはロンバルディア平原・リリイアード軍陣地。

昨日アスターは、シェファーズ残党兵の手により傷を負わされた。奇跡的に発見が早かったのと、わずかに急所が外れていたため、命に別状はなかった。しかし、決して軽い怪我でもなかった。本来ならば、絶対安静だ。

だが、状況がそれを許さなかった。傷の手当を終えた直後ローザリオン進軍の一報が王城にもたらされた。

ローザリオンの動きに注意をはらっていたのだが、奴らのほうが一枚上手だったと認めざるを得ない。

秘密裏に軍を集結させ、アスター負傷で弱っているところをついてきた。ただでさえ、鬼神アスターの負傷はリリイアードの兵士たちを動揺させ、さらにローザリオン進軍という追い打ちに軍の士気はかなり低下している。そのうえアスターが戦には出ないということになれば、ローザリオンに負けるだろう。アスターは戦陣に立つことを決意した。

もちろん、医師からも臣下からも諫められたが彼らも、鬼神なしで、この状況を打開するのは難しいことを理解していた。痛む体の中に痛み止めの薬草を流し込み、無理やり体を動かしている状態だった。現在ロンバルディア平原でのにらみ合いが続いている。やつらの要求は『シェファーズからの撤退』だ。表向きは国を追われた王妃アルグリアと王女ディアナの要請で軍を動かしたことになっているが、結局我らと同じ穴のムジナ。彼らものどから手が出るほど欲しいのだ。豊かなシェファーズという領土が。

『ここで引くわけにはいかない。ここで負ければ、すべてが無駄になる。シェファーズ国王を殺したことも……』

アスターは自分の感情をもてあましていた。確かにシェファーズ進軍はリリイアードにとっても利益が大きい。だが、それを実行しよ

うとしたきっかけは『癪に障る』からだ。それが真実。国王であるシルヴィアの父を殺したのもそれが原因。今までシェファーズ国民にもシルヴィアに対しても謝罪の気持ちなど欠片もなかった。しかし、今は……。

『あなたが好きなんです』

シルヴィアの一言がアスターを揺さぶる。あのあと彼女はマルリオザ侯爵家の手に落ちた。マルリオザに潜ませていたモシヤスから知らせを受けた直後、生きていたという安堵と共に早く救い出さねばと気が急いたが、助けに行くことができない状況がアスターをイラつかせてもいた。

だからこそ、イオルを行かせた。イオルならばシルヴィアを救出できると。彼女のことを任せられるのは自分の半身であるあいつだけだった。

『ここで死ぬつもりはない。必ず生きて帰る。そして……』

バタバタバタ

兵士の動きが突然慌ただしくなる。しばらくすると一人の兵士がやってきてアスターの前で膝をついた。

「申し上げます。ローザリオン、進軍開始。こちらへ向かっております」

「そうか」

アスターは立ち上がると櫓を飛ばした。

神の娘9

「弓兵部隊前へ！」

アスターの指示で弓兵部隊が矢をつがえる。

「放てー！ー！」

十分ひきつけてから何百という数の矢がローザリオンに向かって放たれた。

ヒューン ドスドスドス

数多の矢が命中する。が、大軍ローザリオンはひるまない。生き残った騎馬隊がリリアードの陣に突っ込んだ。弓兵部隊は蹴散らされ、あつという間に混戦模様となる。ローザリオンの騎馬隊に数で劣るリリアードは力負けしていた。

「アービス。左翼と右翼を移動させろ！」

「はい」

アスターの指示通り軍を動かす。このまま、力負けしたと見せかけ、左右翼の陣形を細長くしていき、ローザリオンの部隊を包囲する作戦だった。徐々に包囲網を完成させていくリリアード。ローザリオンは、気づいていないのか中央突破の勢いを緩めることはなかった。

「よし」

アスターはリリィアード軍に攻撃命令を出す心積もりをして、そのときを待った。

だが、予想外のことが起こった。突如、左右から伏兵部隊が現れたのだ。

「なに！」

包囲網の要である左右翼の部隊が総崩れになる。包囲するために陣形が薄く間延びしたところを狙われた。

「やられた」

アスターの作戦は読まれていたのだ。そのまま伏兵部隊は中央軍と連携し、逆にリリィアード軍を包囲し始めた。味方が次々と倒されていく。リリィアード軍の命令系統もズタズタで、大混乱に陥っていた。

アスターは悔しさに唇を噛み締め、ローザリオン軍を睨み付ける。連戦連勝無敗の将軍と言われてきたアスター。なのに、相手の策略にまんまとはまり、なす術もないとは……。なんともなさない限りだった。

「鬼神アスター覚悟……！」

ローザリオンの騎兵が馬に乗るアスターに迫る。

ガキン

「くっ」

かろうじて相手の剣を受け止めたが、傷のせいで本来の力の十分の一でもない。

「やー!」

相手は気迫を込め、打ち込んでくる。その勢いに押され、馬から転げ落ちた。

「ぐっ」

「アスター様!」

近くで別の騎兵を相手していたアービスがすかさず助けに入る。

ズバツ

剣を一閃。アービスは敵をしとめると馬を降り、剣を支えに肩で息をするアスターに駆け寄る。

「大丈夫ですか? アスター様」

「ああ」

顔色が悪い。ポタツポタツと鎧の下から鮮血が滴り落ちている。

「アスター様……」

脇腹に負った傷が開いたのだ。

「心配するな。大したことはない」

そんなわけがなかった。傷が痛むのだろう。傷口を押さえ、膝をついている彼は今にも倒れそうな感じだった。

「…アスター様。お逃げください」

アービスは言う。

「何を馬鹿な」

アスターの顔が強張る。

「このままでは、全滅です。あなただけでもお逃げください」

アスターは怒りに顔をゆがめアービスの胸倉をつかむ。

「お前たちを置いて一人で逃げられるか！」

アービスはぐっとアスターの両肩を掴むと彼を諭した。

「私たちの代えなどいくらでもあります。ですが、あなたの代わりになれる人間などいないのです！」

「……」

その言葉にアスターは何もいえなかった。

「あなたがいなくなれば、リリィアードはローザリオンに飲み込まれます。国のため。民のため。我々のために。生きてください」

「アービス。おまえ……」

アービスは微笑んでいた。

「さあ、お早く」

その時、アスターの周りを守っていた兵士たちの悲鳴が聞こえた。

ズバッ

「ぐわー！」

絶体絶命。アスターは敵に囲まれ、逃げ道はどこにも残されてなかった。

『ここまでなのかつ！』

アスターは悔しさに唇を噛み締める。

神の娘10

シルヴィアが、ロンバルディアに到着したのは、まさにそのときであつた。

森を抜け、彼女の目に飛び込んできたのは、ローザリオン軍に取り囲まれたリリアード軍の姿。

遠くに漆黒の騎士が地に膝をついているのが見える。

「アスター様！」

シルヴィアは馬で戦場に飛び出した。が・・・。

ヒヒーン

突如馬の首から血が吹き出した。

「きゃー！ー！」

ドンッ

馬の体が横倒しになる。

「あっ」

シルヴィアが身を起こしたときにはもう馬の瞳からは生気が失われていた。剣の切っ先が眼前に突きつけられる。

「これは、これは、あなたにこんな所でお会いするとは思いません

でした」

顔をあげ、彼らを見たシルヴィアは絶句した。

「あなたたちは……」

それは、昨日、アスターを切ったシェファーズ近衛軍の兵士たちだった。

「そこをどいて」

シルヴィアは立ち上がり、剣を恐れることなく近衛兵たちに近づいていく。

「それは、できません」

「お願い。どいて」

しつこいシルヴィアに近衛兵たちは舌打ちする。

「ですから、できません」

業を煮やしたシルヴィアは大声を張り上げる。

「いいから、どいてーーーーー！」

シルヴィアは彼らの輪から飛び出そうとした。

「このっ！」

ゆつくりと、銀色に輝く剣がシルヴィアの命を奪いに近づいてくるのが見えた。

『切られる』

ズバッ

しかし、倒れたのはシルヴィアではなく近衛兵たちの方だった。

「まったく、何度私を冷や冷やさせれば気が済むんですかっ！」

「イオル様！」

「波乱万丈だよな。姫さんは」

「モシャスさん。それにみんなも」

シルヴィアを助けたのはイオルとその部下たちだった。

だが、安堵したのも束の間、遠くにいたローザリオン兵が動くのに気づいた。

剣を抜いたローザリオン兵が一斉にアスターたちに襲い掛かったのだ。イオルたちもそのことに気がついた。

「まずい！」

そして、それを見た瞬間、シルヴィアの中で何かが弾けとんだ。

「やめてーーーーー！」

『アスター様を助けて！』

シルヴィアの魂の叫びに呼応するかのごとく大地がドドドドドと地響きをあげ、揺れ始めた。

「なっ、なんだ。なんだ」

突然の地震に、ローザリオン・リリィアード両軍の動きが止まる。そして空からギャギャギャという音がしたかと思うと、太陽が何かに遮られ暗くなった。バサバサバサと空から飛来してきた何かに突如襲われるローザリオン兵。

「うわーー」

「なんだ！」

「やめろーーー！」

ある者はくちばしで、ある者は爪で攻撃され散り散りに逃げ惑う。その場で繰り広げられる有り得ない光景にリリィアード兵はただ呆然と見守るしかなかった。

「これは……。鳥？」

兵士の誰かがポツリとつぶやく。数え切れないほどの鳥たちがローザリオン兵を攻撃していたのだ。

その猛攻に耐え切れずローザリオン兵は馬で逃げようとするが、乗ろうとしても振り落とされる始末。

結局、徒歩で逃げるしかなかった。

残されたのはリリィアード軍とローザリオンに加担したシェファーズの兵士たちだけだった。

カランと誰かの手から剣が零れ落ちるとそれを合図に次々と彼らの手から剣が離れていく。沈黙が続く。

すると、どこからともなく美しい歌声が聞こえた。その声に導かれるかのように、ローザリオン兵を追い払った鳥たちがロンバルディア平原に舞い降りる。ローザリオン兵に取り残された馬たちも歌声の方へと集っていく。

視線をやるとそこには数人の人間の姿が見て取れた。

その中心にいるのは淡い輝きを放つシルバードの少女。

彼女は少し小高い所で祈るように歌っていた。だが、兵士たちがいるところからは大分距離があり、歌など聞こえるはずがない。なのに、聞こえるのだ。

森の中からもさまざまな動物が顔を出す。そよ風に吹かれ、植物たちもさわさわとしゃべりだす。

まさに奇跡としか言えない光景がそこにはあった。

「ううううわぁー！ー！ー！」

この不可思議な現象を目の当たりにしたシェファーズ兵が次々に悲鳴をあげ、その場にひれ伏していった。

「申し訳ございませんでした。お許しください」

彼らの口からは許しを請う言葉が飛び出す。

「お許しください。お許しください。どうか…。聖女シェルフアー様！」

アスターの頭の中でエル・ファミール教会の老修道女の声が聞こえた。

『聖女シエルファア。大地の神の娘。数多の人間の血に染められた大地を救うべくこの地に降り立つ』

「…神の…娘」

アスターの声が聞こえたのか、シルヴィアがこちらに微笑みかけた。そうアスターは感じていた。

終章 あなたにすべてを捧げます

終章 あなたにすべてを捧げます

王城では戦勝の宴が催されていた。シルヴィアの起こした奇跡に皆興奮し、彼らは口々にこう言う。

『シルヴィア姫は神の娘だ。』と。しかし、そこにシルヴィアの姿はどこにもなかった。

彼女はひっそりと寝所のバルコニーにたたずんでいた。

「この戦の功労者が、こんな所で何をしている」

「アスター様」

振り返ると、そこにはアスターがいた。アスターがゆっくりとこちらへやってくる。

「星を…見ていたのです」

彼はシルヴィアの横に立つとシルヴィアと同じように空を見上げた。満天の星空だった。

二人は、しばらく、その星空の美しさを堪能した。

「お前には礼を言わなければ…ならないな」

アスターは星空から視線をシルヴィアへと移す。彼女も自分の顔を見つめている。

その澄み渡った穢れのない瞳に見つめられると、心の奥底がさわさ

わした。

しかも、人、特に女に対して礼を言ったことなどない。表情は変わらないのだが、緊張で手が汗ばんできた。

「シルヴィア…。あ、あり…。ありが…。」

『ありがとう』

たった一言の言葉が出てこない。内心アスターは焦っていた。

『何をやっているんだ！ 俺は！』

宴を抜け出してきたのは、彼女に礼を言うためだ。

リリィアード、そしてアスターはシルヴィアに対して酷いことしかしてこなかった。

なのに、彼女は自分たちを助けてくれた。見捨てても誰も文句など言わなかったのにだ。

シルヴィアが見せた彼女の心意気にリリィアード第一皇子アスターとして答えねばと思った。

その方法の一つがリリィアード代表として感謝の意を伝えること。意を決してやってきたのに情けない。

情けない自分に苛立った。

『しっかりしろ！ 俺！』

自分を叱咤し、再度試みる。アスターは深呼吸し、仕切りなおす。

「シルヴィア、今回のことでは礼を言う。あ、ありが…。」

そこで、また止まってしまった。

『くそっ。この馬鹿が!』

心の中で自分自身を罵るアスターにシルヴィアは近づくと、彼の手を両手で優しく包み込む。

「はい」

穏やかな微笑みと共に。

「:シルヴィア?」

礼の言葉は中途半端に途切れてしまったが、彼女はアスターに返事をした。

意味が分からずアスターの頭の中はグルグルする。

『はい? はいって何が?』

自分がおかしくなってるのは分かるが、どうしたらいいのか分からなくなっていた。

逆にシルヴィアは堂々としたものだった。

「ちゃんと、伝わりましたから」

彼女はうれしそうに笑う。

「アスター様の心の声が聞こえましたよ」

「……」

アスターはシルヴィアの笑顔を戸惑いの表情でしか受け止められなかった。

すると、シルヴィアはアスターから手を放すとベルトに挟みこんでいた白い小さな花束を差し出す。

可憐だが、道端にひっそりと咲くその花は、まるでシルヴィアそのもののようだった。

彼女はその花をアスターに捧げる。だが、その意味が分からず氷の彫像のように固まるアスター。

そんなアスターの反応も一向に気にせずシルヴィアは口を開いた。

終章 あなたにすべてを捧げます2

「なずなの花はシェルフアーズの国花です。なぜ、なずなの花が国花になったのかアスター様はご存知ですか？」

「…いや」

まともな思考力を失っているアスターは、それしか言えなかった。

「建国神話の中で聖女シェルフアー様が始祖カイゼル王にこの花を誓いの花として捧げているのです」

「誓いの花？」

「ええ」

シルヴィアは語る。

「戦が終わりに、シェルフアー様は神の世界へと戻らなければなりませんでしたが、シェルフアー様はカイゼル王とともに生きると決められました。そのとき、シェルフアー様は道端に咲くなずなの花を手にとるとカイゼル王に言いました。『私のすべてをあなたに捧げます。神の怒りに触れ、この身が焼かれようとも、朽ち果てようとも、私の心は、魂は、いついかなるときもあなたの傍にいます。永遠の愛をこの花に誓いましょう』と。そして、シェルフアー様はカイゼル王にこの花を捧げられたのです。その後なずなはシェルフアーズの国花となりました」

シルヴィアの言葉一つ一つがアスターの心にしみていく。そしてシルヴィアはアスターの前にひざまずく。

「アスター様。私のすべてをあなたに捧げます。神の怒りに触れ、この身が焼かれようとも、朽ち果てようとも、私の心は、魂は、いついかなるときもあなたの傍にいます。永遠の想いをこの花に誓いましょう」

アスターの手は動かない。一拍おいた後、アスターは眉間にしわをよせ、シルヴィアから視線を外す。

「シルヴィア……。俺は鬼神だ」

「はい」

「鬼と呼ばれ、鬼と名乗っている人間だ」

「はい」

「鬼は人ではない」

「はい」

「だから、人間なら誰もが持っている甘ったるい感情などない」

「はい」

「人を愛し、慈しむ心など、俺にはない」

「……」

シルヴィアはその言葉に少し悲しそうな表情をする。

「俺の人生は血塗られている。穏やかな生活などありえない。俺が望まずとも傍にいれば問答無用で巻き込まれる。今回のように」

二人の脳裏にあの森での出来事が浮かぶ。

「それを承知で、そんなことを言うのか……」

シルヴィアは迷わず答える。

「はい」

シルヴィアの穏やかな表情は変わらない。すべて悟ったかのような微笑みだった。

「これは、私の自己満足です」

アスターの視線がシルヴィアへと戻る。

「あなたに変わってほしいわけではありません。ただ知っておいてほしかったのです。私の想いを」

少しの沈黙ののちシルヴィアは言った。

「あなたを愛しています」

我慢できずアスターは叫んだ。

「俺は、お前の父を殺したんだぞ！」

シルヴィアは正直な気持ちをアスターに吐露した。

「ええ。あなたは父の仇、そのことは許すことなどできません。一生」

シルヴィアの強い光をたたえたまっすぐなその視線にアスターは気おされる。

「ですが、憎みたくても憎みきれないのです。でも、それが今の私です。あなたに対する憎しみも怒りも愛情もすべて……あなたに捧げます」

その瞬間、アスターの体が動いた。なずなの花束をシルヴィアの手ごと握り締めると思いっきり引き寄せたのだ。

右手でシルヴィアの手を左腕でシルヴィアの背を抱く。そして耳元でシルヴィアに囁いた。

「おまえのすべてを俺のものに……」

シルヴィアの想いがアスターに届いた。嬉しさのあまり彼女の瞳から涙がこぼれる。

アスターは左手でシルヴィアの髪をかきあげ、そっとその涙を拭いた。

そして、彼女の頬に手をそえると己の顔をゆっくりと近づけていく。

満天の星空の下、月光に照らされた二人の影が重なり合う。

それは、二人の誓いの口づけでもあり、そして……………。

初めての口づけでもあった。

完

短編 宴のとき

短編 宴のとき

戦勝の宴。イオルは、一人バルコニーで杯を傾けていた。闇夜を照らす月とあまたの星たちに見守られながら、酒を飲む。彼の耳に彼女の声が木霊していた。

『好きだからです』

その言葉を思い出すたびに、胸がきりきり痛み出す。この痛みの原因も理由も分かっていた。だが、その想いを口にすることはしない。いやでできなかったのだ。

自分のほうが先に彼女に出会ったのに……。彼女に触れたのは、自分の方が先なのに……。

悔やまれてならない『あの時』。

もし、自分が彼女の腕を放さなかったら、違う結果になっていただろうか。もっと早く彼女の素性を察していたら、彼女は今頃自分の腕の中に……。

眉根をひそめ、苦しみにゆがむ顔が握り締めた杯の中の酒に映し出される。それに気づいたイオルは、自嘲的な笑みを浮かべた。

『馬鹿だな』

過ぎ去った過去のことを悔やんでも、どうしようもない。すべては、天の定めた運命。

どんなに彼女を抱きしめても、彼女の瞳にどんなに映ろうとも、彼女の心は自分をすり抜け、アスターへと飛んでいく。イオルは天を見上げ、決意する。

「姫の幸せを願っている。だから全身全霊をかけてあなたの幸せを守る。姫が笑っていてくれるなら、俺はどんなことでもしよう。俺のすべてをあなたに捧げる」

決して知られることのない彼女への誓い。

イオルは、強い光をたたえた瞳で、身を翻すと、シャンデリアが放つ人工の光の下へと帰っていった。

短編 宴のとき（後書き）

これにて『姫君の純愛〜鬼と呼ばれた皇子に捧ぐ』（soft version）』完結となります。soft versionは、すでに完結していた話を性描写少なめ、控えめに改稿したものです。それでこの話にはまだまだ続きがあるのですが、続編はもともと性描写少なめなので、改稿するかは未定です。しかし、またこちらで掲載することになりましたら、またよろしくお願いいたします。今まで読んでくださって、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1430u/>

姫君の純愛～鬼と呼ばれた皇子に捧ぐ～（soft version）

2011年8月19日00時13分発行